

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	宇都宮大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	ガーナ、エチオピア、ケニア、タンザニア		
事業名	【和文】	アフリカの潜在力と日本の科学技術融合によるSDGs貢献人材育成プログラム		
	【英文】	Programme for Developing Human Resource to Contribute to SDGs by Merging African Potential and Japanese Scientific Technology		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった 場合のみ記入	(氏名)	松金 公正	(所属・職名) 副学長	
	(交替年月日)	令和4年4月1日		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した 大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用				
https://uu-a.utsunomiya-u.ac.jp/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における <u>2022年度</u> の取組内容について記入してください。
(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望
①交流プログラムの内容 本プログラムでSDGs貢献人材育成を目標に、幅広い課題を包含するSDGsを理解するために文理融合のもと、アフリカ側6大学と協議し、3つのオンライン企画を中心に据えて2022年度は推進した。①7大学で共同開講する必修集中講義「Global Management」の開講、②課題を深く掘り下げる連続国際シンポジウムを6回開催、③参加大学院生が自らの研究成果を発表するStudent Summitの開催。さらに昨年夏の本学教員のアフリカ訪問から実渡航による相互交流を開始し、④学生のアフリカ派遣に備えて「臨地研究」と「ワークショップ」の開講、そして3月にはアフリカ6大学から6名の教員と5名の学生を受入れて⑤「Africa Week」を開催し、招聘教員とは本プログラムの改善・深化について対面で協議した。なお、長期派遣・受入学生はそのまま滞在中である。
【特に優れた取組】 ① 必修集中講義「Global Management」の開講、② 実渡航の開始と派遣学生に対する「臨地研究」および「ワークショップ」の開講、③ アフリカからの招聘教員・受入学生とともに「Africa Week」(開会式・閉会式、シンポジウム、Student Summitを包含)を開催
②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 アフリカの6大学がプログラムに参加しているので、相互の意思疎通を図って魅力的なプログラムを実施するために、あらゆる情報を相互に公開して協議する定期的な会議を開催している。さらに実渡航の開始により6大学の教員を招聘し、本プログラムのこれまでの進捗状況と今後2年間の運営方針について対面で協議した。共同開講の必修集中講義「Global Management」では教育用Webアプリ「C-learning」を用い、教育の質保証を伴った成績評価システムで適切にCertificateが授与される点がアフリカ側に好評であった。また、派遣学生に対する「臨地研究」および「ワークショップ」を実施し、参加学生のSDGs貢献人材としての主観的能力の向上をはかった。
【特に優れた取組】 ① 事業推進室会議およびUU-A月例会議の定期的開催によるプログラムの推進、② アフリカからの招聘教員との対面協議、③ 教育用Webアプリを用いた必修集中講義「Global Management」の開講、④ 派遣学生に対する「臨地研究」および「ワークショップ」の開講で学生の主観的能力の向上
③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 本プログラムで初となる派遣学生の実渡航を開始するにあたり、本学学生が毎年のように留学しているガーナへの派遣を検討するために、昨年夏に教員をガーナ大学に派遣して受入れ状況を調査した。また、派遣に先立って「臨地研究」および「ワークショップ」を開講するとともに、交換留学生向けオリエンテーションにも参加させて安全管理および黄熱病ワクチン接種について対応した。一方、受入学生に関しては、一斉に同じ飛行機で来日する日程として、「Africa Week」の実施とともに同一の日程とプログラムで対応し、特に短期受入学生には同一プログラムの後に10日間ほど研究分野が該当する本学教員の研究室に受入れとなるように手配した。
【特に優れた取組】 ① アフリカ5大学からの専門分野が異なる短期・長期受入学生を同一日程・プログラムで受入を実施し、招聘教員も合同で「Africa Week」を開催し、地元紙などでも報道された。
④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 本事業の日本語版及び英語版のホームページ (https://uu-a.utsunomiya-u.ac.jp) を設けて情報を公開している。また、本事業に関する日本語版及び英語版のパンフレットを作成し、本学大学院修士課程の新入生やアフリカの6大学に配布した。これらの取り組みにより、本学学生およびアフリカの学生に対して、学生選考、奨学金、そしてアフリカの学生に対しては宿舎関係の情報を提供した。また、連続シンポジウムの録画はHPで公開し、当初よりJV-Campusともリンクしている。
【特に優れた取組】 ① SDGsに関連した課題を深堀するために開催した連続シンポジウムは、その録画を開始当初よりHPで公開するとともにJV-Campusともリンクさせている。

(2) 特記すべき成果

実渡航にあたって2022年度は2021年度予算の繰越、すなわち実渡航できなかった学生分の旅費の繰越が認められたので、学長戦略経費からJASSO奨学金相当分を支援し、2022年度は派遣・受入ともに一挙に短期4名・長期1名の計5名ずつの実渡航を実現した。さらにアフリカ各大学より1名ずつ教員を招聘し、合わせて「Africa Week」を開催した。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

7大学で共同開講している必修集中講義「Global Management」では教育用Webアプリ「C-learning」を用いて15回の講義ごとに小テストやレポートを課し、その採点結果とともに講義資料や課題をアフリカ側教員と共有している。また、チャット形式による質疑もアプリ上で可能である。このような教育の質保証を伴った成績評価システムにより適切にCertificateが授与される点がアフリカ側に好評であった。なお、必修集中講義では前年度と比較して2022年度は参加希望学生数は223名から267名に増加したが、Certificate授与者数が147名から130名に減少し、この原因を協議して2023年度では改善中である。一方、学生の研究発表の「Student Summit」では、国際学会のWeb発表形式を体験できる点が参加学生に好評であるが、発表用の動画をWebにアップロードするまでの過程で脱落する学生が多いことが判明した。さらに、アフリカ6大学とはZoomにより月例会議を開催し、本プログラムの内容について常に議論している。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	7 人	13 人	21 人	21 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	7 人	13 人	21 人	21 人
30日未満	B (大学院生)	人	7 人	12 人	18 人	18 人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上	B (大学院生)	人	人	1 人	3 人	3 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		0 人	7 人	13 人	21 人	21 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	7 人	13 人	21 人	21 人
30日未満		0 人	7 人	12 人	18 人	18 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	1 人	3 人	3 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度			2021年度			2022年度			2023年度			2024年度		
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		0 人			45 人			66 人			0 人			0 人		
実渡航	オンライン	0人	0人	45人	0人	5人	61人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人		
単位取得を伴う派遣学生数		0 人			45 人			61 人			0 人			0 人		
30日未満		人	人	45 人	人	4 人	61 人	人	人	人	人	人	人	人		
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人		
3ヶ月以上		人	人	人	人	1 人	人	人	人	人	人	人	人	人		
上記以外の派遣学生数		0 人			0 人			0 人			0 人			0 人		
30日未満		人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人		
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人		
3ヶ月以上		人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人		
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)					642.9%			507.7%			0.0%			0.0%		

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

本プログラムの目的であるSDGs貢献人材の育成において、多方面の課題を包含するSDGsを文理融合で理解を深めるために、必修集中講義「Global Management」をインターネットを用いて7大学共同で開講している。この講義では教育用Webアプリ「C-learning」を用い、15回の講義ごとに小テストやレポートを課し、その採点結果とともに講義資料や課題をアフリカ側教員と共有している。本学の学生の受講数は2021年度が52名、2022年度が70名で、また、Certificate授与者数（すなわち単位取得者数）は45名と61名で87%であった。国際共同講義を受講できる点が学生には好評のようで、達成目標に対する実績の割合（B/A）が極めて高くなったと思われる。なお、本学の学生は「C-learning」を日常的に使用しているため、問題はなかった。

一方、水際対策の緩和に伴い、本年度からは実交流を開始し、まず9月に推進室所属の教員2名がガーナ大学を訪問し、本学学生をガーナ大学に派遣することなどを協議した。またその事前教育として「臨地研究（On-site studies）」および「ワークショップ」を開講した。最終的に2月には本学からは短期4名と長期1名をガーナ大学に派遣し、長期派遣学生は年度を越えて滞在中である。しかし、実渡航にあたって2022年度は2021年度予算の繰越、すなわち実渡航できなかった学生分の旅費の繰越のみが認められたので、学長戦略経費から繰り越せなかったJASSO奨学金相当分を支援した。

なお、派遣が2月であったため、次項の「2.（4）海外相手大学との単位互換」では実績を「0」とした。

【特に優れた取組】

① 教育用Webアプリを用いた必修集中講義「Global Management」の開講、② 派遣学生に対する事前教育として「臨地研究（On-site studies）」および「ワークショップ」を開講

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計3		0	人	7	人	13	人	21	人	21	人
単位取得を伴う受入学生数		0	人	7	人	13	人	21	人	21	人
30日未満			人	7	人	12	人	18	人	18	人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人	1	人	3	人	3	人
上記以外の受入学生数		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日未満			人		人		人		人		人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●海外相手大学追加調査分

学生別		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計4		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
単位取得を伴う受入学生数		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日未満			人		人		人		人		人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人		人		人		人
上記以外の受入学生数		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日未満			人		人		人		人		人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●合計人数

学生別		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (C=小計3+4)		0	人	7	人	13	人	21	人	21	人
単位取得を伴う受入学生数		0	人	7	人	13	人	21	人	21	人
30日未満		0	人	7	人	12	人	18	人	18	人
30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
3ヶ月以上		0	人	0	人	1	人	3	人	3	人
上記以外の受入学生数		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

② 外国人学生数の実績

学生別		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (D)		0	人	102	人	74	人	0	人	0	人
実渡航	オンライン	0	人	0	人	5	人	0	人	0	人
	ハイブリッド	0	人	102	人	69	人	0	人	0	人
単位取得を伴う受入学生数		0	人	102	人	74	人	0	人	0	人
30日未満			人	102	人	69	人		人		人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人	1	人		人		人
上記以外の受入学生数		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
30日未満			人		人		人		人		人
30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
3ヶ月以上			人		人		人		人		人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)				1457.1%		569.2%		0.0%		0.0%	

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

本プログラムの目的であるSDGs貢献人材の育成において、多方面の課題を包含するSDGsを文理融合で理解を深めるために、必修集中講義「Global Management」をインターネットで7大学で共同開講している。この講義では教育用Webアプリ「C-learning」を用い、15回の講義ごとに小テストやレポートを課し、その採点結果とともに講義資料や課題をアフリカ側教員と共有している。また、チャット形式による質疑もアプリで可能である。このような公平な教育の質保証を伴った成績評価システムにより適切にCertificateが授与される点がアフリカ側に好評であり、Certificateがアフリカ学生の保証に使用されているようである。また、無料でオンデマンドで国際共同講義を受講できる点も学生には好評で、達成目標に対する実績の割合（B/A）が極めて高くなったと思われる。

その結果、2021年度はアフリカ側の参加希望学生数171名に対しCertificate授与者数102名（授与率60%）であった。しかし、2022年度は参加希望学生数197名と増加したがCertificate授与者数が69名（35%）と大きく減少した。この原因を招聘教員と対面で協議したところ、アフリカ6大学の教育研究プログラム日程と本講義の3回のリアルタイム講義と重なった点、インターネットが不安定で重い講義動画を連続して安定して視聴出来ない、開講期間の延長、などの意見が出され、2023年度は対応して改善していく。

一方、水際対策の緩和に伴い、本年度からは実交流を開始し、アフリカ側と協議して、最終的に3月にアフリカ6大学から教員1名ずつを招聘し、同じく短期4名と長期1名を受入れた。招聘教員・受入学生は一斉に同じ飛行機で来日する日程として、「Africa Week」の実施とともに同一の日程とプログラムで対応し、特に短期受入学生には同一プログラムの後に10日間ほど研究分野が該当する本学教員の研究室に受入れとなるように手配した。なお、長期受入学生は年度を越えて滞在中である。しかし、実渡航にあたって2022年度は2021年度予算の繰越、すなわち実渡航できなかった学生分の旅費の繰越のみが認められたので、学長戦略経費から繰り越せなかったJASSO奨学金相当分を支援した。

なお、派遣が2月であったため、次項の「2.（4）海外相手大学との単位互換」では実績を「0」とした。

【特に優れた取組】

① 教育用Webアプリを用いた必修集中講義「Global Management」の開講、② 招聘教員・受入学生とともに「Africa Week」を実施

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
2023年3月	Student Summit 2023	23 人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

単位互換を実施する海外相手大学数	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	0	0	2	2	4	4	6	6	6	6

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 宇都宮大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	
ジョモ・ケニヤッタ農工大学	認定者数	B (大学院生)	0	4	4	4	4
	認定単位数	B (大学院生)	0	8	12	8	12
アジリアベバ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	3	4	4
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	6	12	8
メル科学技術大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	3	3	3
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	6	10	6
ダルエスサラーム大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	3	3
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	6	10
ネルソンマンデラアフリカ科学技術機構	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	3	3
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	10	6
ガーナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	3	3	4	4
	認定単位数	B (大学院生)	0	6	6	8	12
年度別認定者数合計			0	7	13	21	21
年度別認定単位数合計			0	14	30	54	54

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計			0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

単位互換を実施した海外相手大学数	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	0	0	0	0	0	0				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 宇都宮大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ジョモ・ケニヤッタ農工大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
アジリアベバ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
メル科学技術大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
ダルエスサラーム大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
ネルソンマンデラアフリカ科学技術機構	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
ガーナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	
年度別認定者数合計			0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計			0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	山口大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	ナイロビ大学（ケニア）		
事業名	【和文】	アジア・アフリカにおけるOne Health問題の解決に向けた感染症対策を担う獣医師育成プログラム		
	【英文】	Veterinarian training program responsible for infectious disease control to solve One Health problem in Asia and Africa		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった場合のみ記入	(氏名)	石井 由理	(所属・職名) 副学長（国際連携担当）	
	(交替年月日)	令和4年4月1日		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用				
https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~sekaitenkai/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。
(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望
①交流プログラムの内容 2021年度に予定し延期となっていた1期生の学生交流、及び2期生の学生交流を実施することができた。学部生交流に関しては、受入・派遣ともに両大学の学生が混じって実習を行うことにより、英語でコミュニケーションを取りながら進めたことから、両学生にグローバルな感覚を身に着けるきっかけとすることが出来た。2023年度からは、当初の予定であった4名ずつに加え、8名～10名程度（獣医系他大学の学生も含めて募集も行う）まで参加者を増やし、獣医領域とは別に他学部への本プログラムの展開も進め、アフリカへの訪問、体験を行う学生数の拡大を進める予定である。
【特に優れた取組】 ナイロビ大学生が、本学で実施している高度感染症実習に参加し、バイオセーフティーレベル（BSL）-2実験室、BSL-2動物実験室、BSL-3実験室を利用する体験は、参加学生にとって貴重な経験となった。また、受入・派遣ともに学外の関係機関（長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点、KEMRI等）の視察も加えることにより、獣医師としての視野を広げることができた。
②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 ナイロビ大学で実習を行った山口大学1期生4名、及び山口大学で実習を行ったナイロビ大学1、2期生8名に対して、「国際獣医学特別研修B」の単位認定を行った。2023年2月に開催したプログラム運営委員会において、同学生には、受講済みのオンライン共通講義「獣医国際感染症学」の単位認定と併せて「獣医国際感染症コース」の修了が認定された。今後は、単位互換の実現、及び既存の協定を大学間国際交流協定へと発展させるよう、ナイロビ大学との協議を進めたい。
【特に優れた取組】 国際獣医学特別研修については、単位認定に関する申し合わせに基づき、発表、レポート等により評価を行い、また、コース修了認定者には修了証を発行している。
③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 受入については、来日後の買い物リストを配付したり、会話を中心とした日本語授業をナイロビ現地で2日間、来学直後に1日半学び、日本での生活に順応しやすい環境を整えた。一方の派遣について、安全に係るしおりを作成し、渡航前に危機管理説明会（海外における危険事例、全般的な安全対策、健康管理）と派遣説明会（ケニアの基礎知識、ナイロビでの危険事例・区域と安全対策、感染症と対策、緊急連絡先、準備物など）を行った。また語学面では、ナイロビ大学生受入の際に交流を図ったり、渡航直前に2日間の集中英語研修を本学で行い、現地での実習や学生との交流で能動的にコミュニケーションが取れるよう英語力のスキルアップを図った。
【特に優れた取組】 受入では、現地在住で本学卒業生で日本語教師の資格を持つ方に日本語授業を依頼した。「話す」「聞く」を優先して学習し、日常生活や見学先での会話を習得することを達成目標とし、使う教材に連続性を持たせ、ナイロビでの学習内容、山口での学習内容を共有し、習った言葉、フレーズが使えるように担当者間で連携して取り組んだ。
④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 事務職員向けの業務英語能力向上研修の実施、来学したナイロビ大学教員を講師とした全教職員・学生向けのセミナーの開催により、国際化と事業の全学的な普及を推進した。一方で、事業専用ウェブサイトの更新頻度は高くはないことから、事業推進体制の見直しを含めて、今後はウェブサイトを積極的に活用した情報発信を進めると同時に、事業と関連付けたイベントの開催を積極的に行っていく。
【特に優れた取組】 ナイロビ大学教員によるセミナーを皮切りに、学内外からの講師を招いたトークイベント「アフリカフェア」を立ち上げた。定期的を開催することで、アフリカ地域への興味関心を醸成する機会を提供している。

(2) 特記すべき成果

派遣経験学生で派遣後TOEICを受けた6名のうち、5名はTOEIC点数が向上し、そのうち2名は100点以上向上した。また、英語でのセミナーやミーティングに躊躇なく発言できるようになり、英語能力が向上した。加えて、本事業で受け入れたナイロビ大学生において、8名中4名が卒業後、本学共同獣医学研究科への進学を希望しており、派遣学生についても、第1期生4名（現6年生）のうち、3名が研究科への進学を希望し、うち2名はナイロビ派遣が進学へのきっかけとなっている。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

2021年度に本学に設置した遠隔システムを利用し、ナイロビ大学とオンライン接続で、ナイロビ大学学生、教員とのグループディスカッション、本学学生派遣の際のミーティング、研修報告会(ナイロビ大学生8名本学学生4名)、アプリカフェア（ケニア、ガーナ出身の教員、学生による各国の紹介）などをを行った。2023年度以降は、より積極的に両大学で遠隔講義システムを使ったイベントやディスカッションを行う予定である。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	人	人数	人	人数	人	人数	人	人数	人
小計2			0	人	16	人	16	人	16	人	16	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日未満	A (学部生)	0	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人
上記以外の派遣学生数			0	人	12	人	12	人	12	人	12	人
	30日未満	A (学部生)		人	10	人	10	人	10	人	10	人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)		人	2	人	2	人	2	人	2	人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●海外相手大学追加調書分

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	人	人数	人	人数	人	人数	人	人数	人
小計2			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日未満			人		人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人
上記以外の派遣学生数			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日未満			人		人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●合計人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	人	人数	人	人数	人	人数	人	人数	人
合計人数 (A=小計1+2)			0	人	16	人	16	人	16	人	16	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日未満		0	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
上記以外の派遣学生数			0	人	12	人	12	人	12	人	12	人
	30日未満		0	人	10	人	10	人	10	人	10	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	2	人	2	人	2	人	2	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

② 日本人学生数の実績

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	人	人数	人	人数	人	人数	人	人数	人
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)			0	人	19	人	28	人	0	人	0	人
実渡航	オンライン	ハイブリッド	0人	0人	19人	0人	10人	18人	0人	0人	0人	0人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	8	人	8	人	3	人	0	人
	30日未満	A (学部生)		人	8	人	8	人	3	人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人
上記以外の派遣学生数			0	人	11	人	2	人	15	人	0	人
	30日未満	A (学部生)		人	11	人		人	15	人		人
	30日未満	B (大学院生)		人		人	2	人		人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)					118.8%		175.0%		0.0%		0.0%	

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

2022年度には、コロナ禍により実施出来なかった学生交流も含めて、実渡航を伴う学生交流が実施できた。一方で中間評価でも指摘されたように、特に実渡航を伴う派遣学生数の拡大が課題となったことから、獣医系学部を持つ他大学や学内他学部への展開を進めており、2023年度の9月派遣時には他大学から2名が参加を予定している。加えてオンラインについては、2023年度に感染症以外の獣医学に関連する内容を扱った「熱帯獣医学」を新設し、オンライン講義の拡充を図った。同科目と、既存の「国際感染症獣医学」については、本学共同獣医学部と相互補完型の教育体制を行っている鹿児島大学共同獣医学部でも科目化されることとなった他、獣医系他大学にも提供を開始し、加えて正課外でアフリカフェアや国際協力機構(JICA)と連携したトークショーといったアフリカ地域に対する興味関心を醸成するイベント実施により大学全体にアフリカとの交流に対する機運を高め、学内外で受講者数の増加を図っていきたい。

【特に優れた取組】

ナイロビ大学での現地実習では、学生7～9人のグループに1名の山口大学生が加わる形式で実施され、また、実習後には各自のフィードバックを英語での発表を行ったおり、帰国後のTOEIC受講でスコアアップが見られるなど、語学力を向上することができた。派遣ではナイロビ大学以外の研究機関や組織への訪問もプログラムに組み込むことによって、多面的な角度からOne Health問題を捉える視野を醸成する機会となった。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3		0 人	16 人	16 人	16 人	16 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
30日未満	A (学部生)	人	4 人	4 人	4 人	4 人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の受入学生数		0 人	12 人	12 人	12 人	12 人
30日未満	A (学部生)	人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	人	2 人	2 人	2 人	2 人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)		0 人	16 人	16 人	16 人	16 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
30日未満		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の受入学生数		0 人	12 人	12 人	12 人	12 人
30日未満		0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	2 人	2 人	2 人	2 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)		0 人	8 人	9 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド	0人	0人 8人 0人	9人 0人 0人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	8 人	0 人	0 人
30日未満	A (学部生)	人	8 人	8 人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	1 人	0 人	0 人
30日未満	A (学部生)	人	人	人	人	人
30日未満	B (大学院生)	人	人	1 人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)			50.0%	56.3%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

2022年度には、コロナ禍により実施出来なかった学生交流も含めて、実渡航を伴う学生交流が実施できた。一方で、オンラインの受入数が伸びないことから、本学学生のナイロビ大学派遣時に、引率教員から本事業のPRを行ってもらうことや、ナイロビ大学の国際担当副学長等との懇談の機会を設け、本事業のナイロビ大学での浸透を図りたい。

【特に優れた取組】

ナイロビ大学生が本学滞時に受講する「動物感染症総合実習」は学部4年生対象のもので、高病原性微生物の生態、病原機構、検出法および感染予防に関する診断・調査に必要な高度専門知識を習得することを目的としている。特に、BSL-2実験室、BSL-2動物実験室に加え、防護服を着用してBSL-3実験室を利用する体験は、参加学生にとって貴重な経験となった。英語版の実習テキストも準備しており、大学院生がチューターとして補助する体制で、共同獣医学部4年生と一緒にグループ分けされ、学生間の交流を図りながら進めることから、両学生にグローバルな感覚を身に着けるきっかけとなる有意義なものとなった。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：山口大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ナイロビ大学	認定者数	0	4	4	4	4
	認定単位数	0	5	5	5	5
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	4	4	4	4
年度別認定単位数合計		0	5	5	5	5

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数	0	0	0	0	0	0				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ナイロビ大学	認定者数	0	0	0		
	認定単位数	0	0	0		
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	北海道大学		
主たる交流先	アフリカ諸国	ザンビア共和国	
事業名	【和文】	アフリカと日本の架け橋となる次世代の人材を育成する国際獣医学・保全医学教育プログラム ～ザンビア・北大の頭脳循環成果を基盤として～	
	【英文】	International Veterinary and Conservation Medicine Education Program: Building upon generations of collaboration between University of Zambia and Hokkaido University for the future of Africa-Japan relations	
事業責任者 ※交替年月日は変更があった場合のみ記入	(氏名)	滝口 満喜	(所属・職名) 獣医学研究院・研究院長
	(交替年月日)	2021/4/1	
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した大学のみ記入	大学名		国名
		(日本語表記)	(英語表記)
	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
10			
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用			
https://africa.vetmed.hokudai.ac.jp/			

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

①交流プログラムの内容

本事業はザンビア大学と協働しOne Healthに貢献し国際的かつ分野横断的な視点で保全医学を担う人材育成を目的としている。2022年度はパンデミックの状況と対策を熟慮した上で初めて実渡航を伴う活動を実施した。ザンビア大学の学生4名、北海道大学の学生8名がそれぞれの国に約2週間渡航し、環境管理や野生動物保全を中心に座学とフィールド演習を組み合わせたプログラムに参加した。並行してオンラインコースも設置し関連イベントへの参加も合わせて両大学から学生が受講した。

【特に優れた取組】

本事業はザンビア大学と北海道大学で保全医学を担う人材育成を目的とし分野を問わず学生を募集している。多様な学生の専門性を活かして学び合うために、北海道大学で学生が希望する研究室にて活動を行うラボローテーションやザンビア大学での課題探求活動など学生が主体的に計画／活動する期間を設け、各自の実施内容や成果を共有し合う場を設けた。

②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

本事業では2021年度のオンライン実施段階からルーブリックを用いるコンピテンシー評価を取り入れており、参加学生が自覚的に学修成果を伸ばすことが可能である。2022年度は過年度の参加学生及び学内運営委員の意見を取り入れルーブリックの更新を行い、学生と担当教職員による渡航前後の評価を行った。短期間のプログラムであるため実施期間中のルーブリックの活用が課題であり、2023年度に向けて渡航期間中にも評価とフィードバックのタイミングを設定するなど改善のサイクルを柔軟に行う体制を整備した。

【特に優れた取組】

本事業ではルーブリックを用いるコンピテンシー評価を取り入れており、参加学生が自覚的に学修成果を伸ばすことが可能である。オンラインで実施した2021年度のプログラム実施後のコンピテンシー評価に比べると、実渡航を伴うプログラムでは特に「課題解決能力」が顕著に上昇し、語学に関してはザンビア大学学生の能力(日本語)がプログラム実施後に顕著に伸びたなど、実渡航の教育効果を視覚的に確認できた。

③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

分野横断的に多様な学生が参加できるよう、両大学で全学的に学生を募集した。ザンビア大学では全学の国際交流担当者と連携し、北海道大学では大学院共通授業科目としてシラバスをWEBサイトに掲載した。また、ハイブリッド形式で全学向けに募集説明会を行い、ザンビア大学からは2部局、北海道大学からは文理を横断した6部局から学生が参加した。渡航前のサポートとしてザンビア大学の学生向けには日本語のオンライン学習サービスを提供し、北海道大学の学生向けには海外安全管理セミナーを提供した。

【特に優れた取組】

保全医学を軸に両大学から多様な学生が参加出るよう、文理の枠を超えた幅広い分野の教員とともに授業の提供や現地での活動支援を行なった。ザンビアへの派遣前には事務職員を含めたプログラム引率担当が渡航して現地カウンターパートとの連携強化や学生の受入先の新規開拓を行った結果、多様な活動内容の確保につながった。

④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

北海道大学のホスティングサーバーに日英表記のWEBサイトを構築し共催イベントを含めた情報提供と成果報告掲載を継続して行った。また、2022年度の受け入れおよび派遣の活動を学生のレポートを中心にまとめた日英表記の報告書を150冊を作成し両大学および関係機関に配付した。同内容は電子版としてWEBサイトにも掲載した。2022年度1月には国際シンポジウムを共催し他大学や外部研究機関からも多様な教員や学生が参加しアフリカにおけるOne Healthに関わる研究・教育について情報交換を行った。

【特に優れた取組】

北海道大学で行われる保全医学に関するイベントを積極的に共催し、ハイブリッド配信やオンデマンドコンテンツ化を通じて両大学の学生に幅広い学習機会の提供を行った。また、これらの情報は整備したWEBサイトやメーリングリストを活用し情報提供を行った。

(2) 特記すべき成果

多様な学生が専門性を活かしつつ参加できるセミオーダーメイドのプログラム構成により、プログラム終了後も継続的な関係性が築かれた。受け入れ学生はラボローテーションへの参加を通じ帰国後も共同研究や博士課程への進学の検討など北海道大学との継続した関係につながっており、派遣学生は課題探求活動で得た人脈や知見を帰国後の自身の研究テーマやキャリアパスの明確化などに反映させることができた。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

■北海道大学、ザンビア大学学生が利用するオンラインコンテンツとして、10コースを整備した。コンテンツについては一部を除きLMSに公開し、学生がアクセスできるように整えた。E-ラーニングコンテンツについては、2023年度も引き続き作成を行う。

■受入学生には渡航前にもオンラインで説明会および訪問先のブリーフィングを行った。また、派遣学生の渡航前学習として開講した授業ではハイブリッド方式やオンデマンド視聴を組み合わせ、さまざまな学年／部局から参加する学生全員が参加できるよう柔軟な対応を行った。

■オンライン授業の提供に関しては時差を考慮し原則オンデマンド方式としている。教員とのディスカッションの機会が損なわれることが課題であったため、学生が各授業の担当教員と直接質疑などを行うオンラインセッションを開催し習熟レベルを引き上げるサポートを行った。コンスタントな受講とモチベーションの維持が課題であり、開講期間中の教員とのこまめなやりとりとフィードバックにより学習支援を行うためにより双方向性の高い新規LMS導入の検討を行い2023年4月に実装した。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		4 人	18 人	18 人	18 人	18 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	8 人	8 人	8 人	8 人
30日未満	B (大学院生)	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の派遣学生数		4 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日未満	B (大学院生)	4 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		4 人	18 人	18 人	18 人	18 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	8 人	8 人	8 人	8 人
30日未満		0 人	8 人	8 人	8 人	8 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の派遣学生数		4 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日未満		4 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		15 人	18 人	19 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド	15人	0人 18人 0人	8人 10人 1人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人 12 人 0 人	8 人 2 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満	B (大学院生)	0 人	0 人 12 人 0 人	8 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 2 人 0 人	人 人 人	人 人 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
上記以外の派遣学生数		15 人	0 人 6 人 0 人	0 人 8 人 1 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満	B (大学院生)	15 人	0 人 6 人 0 人	0 人 8 人 1 人	人 人 人	人 人 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
達成目標に対する 実績の割合 (B, A)		375.0%	100.0%	105.6%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

■2022年度はパンデミックの状況と対策を熟慮した上で初めて学生派遣を実施した。

■北海道大学からは大学院生8名が参加した。事前事後学習を含めて大学院共通授業科目として開講し、参加学生の専攻は工学、食資源、理学、経済学、獣医学、感染症学と分野横断的で、学生間で専門性を活かし相互に学び合った。

■事前学習ではコロナ禍での世界情勢の変容を踏まえ、外部講師による安全管理セミナーを開催した。また、JICAザンビア事務所より国際協力に関する特別レクチャーを提供いただき、国際協力分野でのキャリアパスを含めた内容が取り扱われた。加えて、Academic Englishの授業として英語で異分野の学生や教員とコミュニケーションを取るトレーニングや保全医学に関する基本的な概念や知識などのレクチャーを行なった。2022年度はアウトプットに重点を置き英語でのコミュニケーション能力を底上げする色合いが強かったが、2023年度以降は保全医学に関する専門用語やザンビアで訪問する場所の背景知識のインプットも強化することで現地での学びの質を高める工夫を行う。

■ザンビアでの活動においてはザンビア大学の教員のみならず、JICAザンビア事務所、在ザンビア日本国大使館、コッパーベルト大学、国立公園の管理官、民間の鉱山会社など多様なカウンターパートの協力を得て保全医学に関するザンビアおよびアフリカ全土での課題について多面的に学ぶ機会を提供した。

■事後学習では学生による活動内容の報告会とレポート作成を行い、レポート内容は2022年度活動報告書として公表した。

■オンライン受講者には北海道大学で提供される授業のオンデマンド視聴に加えて、実渡航学生が参加する事前／事後学習にも参加し国内にしながらザンビアの文化や課題について学ぶ機会を提供した。

■ハイブリッド受講として共催シンポジウムでの発表やセミナー受講などを通じて保全医学に関する知見を深める機会を提供した。

■今回のプログラムでは、北海道大学One Healthフロンティア卓越大学院において様々な分野の学生を取り込むAllyコースとも連携しており、プログラム内容にはAllyコースの学生も一部参加した。学内のほかのプログラムとの積極的な連携は、今後、北海道大学以外の大学への波及の布石となると考えている。

【特に優れた取組】

活動のうち2日間を学生自ら企画しカウンターパートと活動する課題探求活動に充てた。活動のテーマは野生動物管理、感染症サーベイ、貧困地域への支援、外交政策、教育活動、森林管理などについて多岐に渡り、各自の専門性と保全医学を結びつけて課題解決手法を考える機会となったと考える。海外において「産官学」の協働プログラムに参加することで帰国後の研究活動やキャリアパスに影響を与えた点が学生から評価された。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3			8 人	14 人	14 人	14 人	14 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日未満	B (大学院生)	0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の受入学生数			8 人	10 人	10 人	10 人	10 人
	30日未満	B (大学院生)	8 人	10 人	10 人	10 人	10 人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日未満						
	30日以上3ヶ月未満						
	3ヶ月以上						
上記以外の受入学生数			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日未満						
	30日以上3ヶ月未満						
	3ヶ月以上						

●合計人数

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)			8 人	14 人	14 人	14 人	14 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日未満		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の受入学生数			8 人	10 人	10 人	10 人	10 人
	30日未満		8 人	10 人	10 人	10 人	10 人
	30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)			13 人	9 人	27 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド		13人	0人 9人 0人	4人 7人 16人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	0 人 7 人 0 人	4 人 4 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
	30日未満	B (大学院生)	0 人	0 人 7 人 0 人	4 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 4 人 0 人	人 人 人	人 人 人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
上記以外の受入学生数			13 人	0 人 2 人 0 人	0 人 3 人 16 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
	30日未満	B (大学院生)	13 人	0 人 2 人 0 人	0 人 0 人 16 人	人 人 人	人 人 人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 3 人 0 人	人 人 人	人 人 人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	人 人 人	人 人 人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)			162.5%	64.3%	192.9%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

- 2022年度はパンデミックの状況と対策を熟慮した上で初めて実渡航を伴う学生受入を実施した。
- ザンビア大学からは大学院生4名が実渡航し、4名がオンライン受講した。参加学生の専攻は獣医学部及び理学部で、野生動物管理や食の安全などの研究背景を持ちプログラムに臨んだ。事前事後学習を含めて北海道大学の大学院共通授業科目を履修し全員に3単位が付与された。
- ザンビア大学の学生は北海道大学でChemical Hazard Contarol Expert(CHCE)の授業を受けたほか、札幌市内の豊羽鉱山において鉱水の浄化処理や鉱滓の管理手法を学んだり、釧路猛禽類医学研究所や知床国立公園におけるフィールド演習で生態系保全やヒトと動物の軋轢の実態と対策などについて学んだりした。鉱山周辺での環境汚染の管理や野生動物とヒトとの軋轢の解消はザンビアにおいても共通する社会課題であり、自国との比較を通して学びを深められるテーマ設定を行った。
- オンライン授業の提供に関しては時差を考慮し原則オンデマンド方式とした。教員とのディスカッションとの機会が損なわれることが課題であったため、学生が各授業の担当教員と直接質疑などを行うオンラインセッションを開催し習熟レベルを引き上げるサポートを行った。コンスタントな受講とモチベーションの維持が課題であり、開講期間中の教員とのこまめなやりとりとフィードバックにより学習支援を行うために双方向性の高い新規LMS導入の検討を行った。
- CHCEの授業はオンデマンド化して実渡航学生とオンライン学生に共通して提供した。また、受験要件を満たした学生は最終提出課題および口頭諮問にも臨み、3名がオンライン版としてiCHCEの認定を受けた。
- 工学、保健・医学、経済、理学、地球環境、食資源、農学、獣医学、感染症学、情報科学など幅広い教員に加え民間企業からも授業の提供やフィールドでの活動支援を受け異分野連携のプログラムを実践した。

【特に優れた取組】

活動のうち2日間を学生が希望する研究室にて活動を行うラボローテーションに充てた。寄生虫学、毒性学、微生物学など各自の研究内容やキャリアパスに応じた研究室に滞在し、フィールドでのサンプリングや実習に参加した。この活動を通して、帰国後も共同研究や博士課程への進学の見直しなどの形で北海道大学との継続した関係性につながった。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
2022年8月	国際シンポジウム Interdisciplinary Challenge: Mine and Environment	204 人
2022年9月	グローバル・キャリア・デザイン First Step Program	350 人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：北海道大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	8	8	8	8
	認定単位数	B (大学院生)	0	24	24	24	24
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	8	8	8	8
年度別認定単位数合計			0	24	24	24	24

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数	0	0	1	1	1	1				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：北海道大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	12	8		
	認定単位数	B (大学院生)	0	20	24		
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	12	8	0	0
年度別認定単位数合計			0	20	24	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	○秋田大学、九州大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	南アフリカ共和国、ザンビア共和国、モザンビーク共和国、ボツワナ共和国		
事業名	【和文】	南部アフリカの持続的資源開発を先導するスマートマイニング中核人材の育成		
	【英文】	An innovative program for development of core human resources for smart mining to lead sustainable resource development in Southern Africa		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった 場合のみ記入	(氏名)	藤井 光	(所属・職名) 副学長（国際戦略担当） 国際資源学研究科・研究科長、教授	
	(交替年月日)			
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した 大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用				
(日本語版) https://www.akita-u.ac.jp/shigen/iuep-w-safrica/jp/				
(英語版) https://www.akita-u.ac.jp/shigen/iuep-w-safrica/en/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

①交流プログラムの内容

2022年度、我々は学生向けに「海外資源フィールドワーク」、「ショートステイプログラム」、「日本語・英語語学研修」、「バーチャルトラベリングクラス」、「資源情報学の基礎」、「日阿協働研修1」の6プログラムを提供した。特に「海外資源フィールドワーク」には秋田大学から10名が参加し、全プログラム英語で行われた。これらのプログラムは資源開発を広範に学ぶ機会を提供し、スマートマイニングへの理解を深めるための重要な研修となった。持続可能な鉱山開発についてのディスカッションや成果発表を通じて、学生たちは知識と英語運用能力を身につけることが出来た。

【特に優れた取組】

新型コロナウイルス感染症蔓延の影響から日阿両国間の物理的な渡航が困難な状況の中であっても、オンライン講義（日本語・英語語学研修、バーチャルトラベリングクラス、資源情報学の基礎）やハイブリッド講義（日阿協働研修1）を組み合わせることにより、質の高い講義を提供することが出来た。

②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

教育の質保証のためのシステムである実行委員会と運営委員会を立ち上げ、2022年度はコロナ禍の感染状況を考慮し、両委員会を対面では各1回の開催となった。日本・アフリカの関係大学とプログラム内容を確認し、学習コンテンツの質をさらに向上させるための協議を重ね、実施体制の整備を進めた。次年度も継続して実施する。

【特に優れた取組】

運営委員会では、日本・アフリカの双方大学参加学生の進捗状況及びカリキュラムの確認を行い、実行委員会では2023年度に本プログラム第2期生となる新規学生の選考及び承認を行った。

③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

オンラインによる学習コンテンツ実行のためのツールとして導入した学習管理システムGOOCUSのデータ整備を行い、本プログラムに合わせて学生が使用できる学習コンテンツの充実及びオンライン講義実施のため、環境整備の改善に努めた。南部アフリカ大学側の学生への本プログラム周知を強化するため、英語版パンフレットを推敲し、再版した。具体的には、南部アフリカ大学側の学生が本プログラムに関する問い合わせ先として、本プログラム事務局のメールアドレスを追記し、いつでも情報提供ができる体制を整えた。

【特に優れた取組】

Learning Management Systemとして導入したGOOCUSのデータ整備を行い、本プログラムに合わせて日阿両国の学生が使用できる学習コンテンツの充実及びオンライン講義実施のため、環境整備の改善に努めた。南部アフリカ大学側の学生のため、英語版パンフレットに本プログラム事務局のメールアドレスを追記し、いつでも情報提供ができる体制を整えた。

④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

本プログラムの活動状況及び募集要項の本事業ホームページへの掲載や学生ガイダンスの実施により、本プログラムの情報提供を積極的に行い、新規プログラム参加学生の獲得につながった。次年度も継続して実施する。

【特に優れた取組】

本プログラムの活動状況及び募集要項の本事業ホームページへの掲載や学生ガイダンスの実施により、本プログラムの情報提供を積極的に行った。

(2) 特記すべき成果

新型コロナウイルス感染症蔓延の最中でありながらアフリカ側学生と日本側学生の交流を積極的に後押しするプログラムを計画・実行することができた。南部アフリカ大学側の学生については、南部アフリカ地域の協力校5大学等から選抜された合計10名の学生が、秋田大学が開講する20日間の「ショートステイプログラム」にオンラインで参加した。コロナ禍のため、双方向型のオンライン研修に切り替えて実施した。本プログラムは資源開発の上流から下流にいたる網羅的な専門講義とグループディスカッションとその成果の発表会から構成されており、スマートマイニング人材育成に直結する優れたプログラムを提供できた。「日阿協働研修1」は講義をオンラインとオンサイトのハイブリッド形式で行い、日本側2大学は秋田大学に集いオンサイトで、南部アフリカ側の5大学は各国からオンラインで参加した。座学での知識習得に加えて、関連するテーマのグループディスカッションの課題を通し、知識の定着と英語によるディスカッション能力の育成がなされた。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

語学教育である「日本語・英語語学研修」、資源学教育「バーチャルトラベリングクラス」、情報学の基礎教育「資源情報学の基礎」は、e-LearningシステムであるGOOCUSを利用したオンデマンドのオンライン講義を提供し、各々の学生の裁量で受講を可能とした。また「日阿協働研修1」はハイブリッド形式の講義を提供し日阿両学生が受講可能とし、日阿混合チームによるディスカッション形式の実習では各班に用意したノートパソコン・スピーカー・マイクを通して議論を深めることができた。改善点としては、e-Learningシステムを用いる際学生の履修状況管理を定期的に行う必要がある。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	10 人	40 人	65 人	65 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	10 人	40 人	65 人	65 人
30日未満	A (学部生)	0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	20 人	35 人	35 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	10 人	20 人	20 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		人	人	人	人	人
30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		0 人	10 人	40 人	65 人	65 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	10 人	40 人	65 人	65 人
30日未満		0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	20 人	35 人	35 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	10 人	20 人	20 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度			2021年度			2022年度			2023年度			2024年度		
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		0 人			10 人			21 人			0 人			0 人		
実渡航	オンライン	ハイブリッド	0人	0人	10人	0人	10人	0人	11人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	
単位取得を伴う派遣学生数		0人	0人	10人	0人	10人	0人	11人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	
30日未満		0人	0人	10人	0人	10人	0人	11人	人	人	人	人	人	人		
30日以上3ヶ月未満		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人	人	人	人	人		
3ヶ月以上		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人	人	人	人	人		
上記以外の派遣学生数		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人		
30日未満		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人	人	人	人	人		
30日以上3ヶ月未満		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人	人	人	人	人		
3ヶ月以上		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人	人	人	人	人		
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)					100.0%			52.5%			0.0%			0.0%		

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

2022年度は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みながら、南アフリカとボツワナに各5名派遣した。2023年度には新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、派遣人数も増加する見込みである。

【特に優れた取組】

2022年度はコロナ禍中での実施であったため、実施体制整備を十分に整えた上で南アフリカとボツワナに各5名派遣した。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3		0 人	10 人	50 人	60 人	60 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	10 人	50 人	60 人	60 人
30日未満	A (学部生)	0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)	0 人	0 人	20 人	30 人	30 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	0 人	20 人	20 人	20 人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)		0 人	10 人	50 人	60 人	60 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	10 人	50 人	60 人	60 人
30日未満		0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	20 人	30 人	30 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	20 人	20 人	20 人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)		0 人	11 人	19 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン	0人	0人	11人	0人	0人
	ハイブリッド	0人	0人	0人	10人	9人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	11 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	11 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)			110.0%	38.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

2022年度は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みて、外国人留学生の受入は行わなかった。一方で、2023年度には新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、受入学生が増加するため、実施体制整備や学習コンテンツの作成を行った。

【特に優れた取組】

2022年度は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みて、外国人留学生の受入は行わなかったが、2023年度には新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、受入学生が増加するため、実施体制整備や学習コンテンツの作成を行った。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	0	0	5	5	5	5	5	5	5	5

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：秋田大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数 A (学部生)	0	4	4	4	4
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4	4	4
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	5	11	11
ザンビア大学	認定者数 A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4	4	4
ザンビア大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	5	11	11
テテ工科大学	認定者数 A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4	4	4
テテ工科大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	5	11	11
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数 A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4	4	4
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	5	11	11
ボツワナ大学	認定者数 A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4	4	4
ボツワナ大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	5	11	11
年度別認定者数合計		0	8	33	58	58
年度別認定単位数合計		0	20	45	75	75

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数	0	0	1	5	2	0				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：秋田大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数 A (学部生)	0	6	5		
	認定単位数 A (学部生)	0	4	4		
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数 A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数 A (学部生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
テテ工科大学	認定者数 A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数 A (学部生)	0	0	0		
テテ工科大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数 A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数 A (学部生)	0	0	0		
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
ボツワナ大学	認定者数 A (学部生)	0	0	5		
	認定単位数 A (学部生)	0	0	4		
ボツワナ大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
年度別認定者数合計		0	6	10	0	0
年度別認定単位数合計		0	4	8	0	0

2. 国内連携大学 【大学名：九州大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	0	0
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	5	11	11
ザンビア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	0	0
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	5	11	11
テテ工科大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	0	0
テテ工科大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	5	11	11
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数	A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数	A (学部生)	0	4	4	4	4
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	5	11	11
ボツワナ大学	認定者数	A (学部生)	0	1	1	1	1
	認定単位数	A (学部生)	0	4	4	4	4
ボツワナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	5	10	10
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	5	11	11
年度別認定者数合計			0	2	27	52	52
年度別認定単位数合計			0	8	33	63	63

2. 国内連携大学 【大学名：九州大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数	A (学部生)	0	4	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	4	0		
ヴィッツウォーターズ ランド大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
テテ工科大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
テテ工科大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
ボツワナ国際科学技術 大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ボツワナ大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
ボツワナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
年度別認定者数合計			0	4	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	4	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	広島大学			
主たる交流先	アフリカ諸国			
事業名	【和文】	南北アフリカとの互恵的パートナーシップ構築のためのトライアングル海外学習プログラム		
	【英文】	Triangular Study Abroad Program for Reciprocal Partnership with North and Sub-Saharan Africa		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった場合のみ記入	(氏名)	金子 慎治	(所属・職名) 理事・副学長（グローバル化担当）	
	(交替年月日)			
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)	(英語表記)	
	1	エジプト日本科学技術大学	Egypt-Japan University of Science and Technology	エジプト
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用				
(日本語版) https://triangle-africa.hiroshima-u.ac.jp/ (英語版) https://triangle-africa.hiroshima-u.ac.jp/en/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。
(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望
①交流プログラムの内容 本事業は、北アフリカ地域のエジプトの5大学、サブサハラ地域のザンビア大学とマラウイ大学の計7大学と共同で、アフリカを質の高い経済成長へ導くための教育、保健医療、食料安全保障の戦略3分野のトライアングル海外学習プログラムを展開する。そして、日本とアフリカを繋ぐだけでなく、アフリカ地域間の架け橋として、多国間の国際的協調においてリーダーシップを発揮し、質の高い経済発展を主導する人材を日本とアフリカの双方に育成する。2022年度は、COIL型教育に広島大学から11名、アフリカの大学から81名が参加した。また、中期留学については、2022年10月～2023年3月までアフリカから5名の学生を受け入れ、前年度2022年2月～2022年12月までザンビア大学に1名を派遣した。さらに、前年度からの翌債予算を活用し、2023年2月25日～3月8日の12日間、本学学生10名をザンビア・エジプトに短期派遣した。
【特に優れた取組】 COIL型教育では計画以上の学生が参加し、講義・グループワークを通じ、多様性理解・複数他者理解を深化させることができた。半年間受け入れたアフリカからの学生5名については、日本語の基礎学習、専門分野の学習・研究に加え、民間企業も訪問し、幅広く日本社会について学ぶことができた。また、翌債予算を活用してザンビア・エジプトに短期派遣した本学学生10名は、協定校に加え、JICA事務所及び事業地を訪問することで重点分野をカバーするとともに、国際協力の実相に触れることができた。また、その際にザンビア・マラウイの学生とともにエジプトに渡航し、対面による複数他者理解を実現することができた。
②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 本学とアフリカ7大学の合同・個別会議を通じて、本事業の到達目標、学生の受入方針、カリキュラム方針（学習内容・評価基準）、修了方針について確認した。自己点検・評価と外部評価委員会の検証結果に基づき、事業運営および教育プログラムの改善と質の向上に取り組んでいる。個別の教育プログラムについても、学生の自己点検と授業評価アンケート、BEVIテスト等を確認することで、授業内容や方法の有効性を検証しプログラムの改善を図っている。
【特に優れた取組】 2023年3月に本学、ザンビア、マラウイ、エジプトの大学関係者がエジプトで一堂に会し、本事業の進捗・計画・課題等を話し合うことで、今後の方向性を確認、共有することができた。また、外部評価委員より、プログラム改善に関する助言を得たことで、改善に向けた取り組みを検討することができた。
③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 事業責任者である理事・副学長の下に事業実施部会を設置し、事業実施コーディネーター、学内関係教員及び事務担当者が協議のうえで事業を推進している。本学の国際室内に、本事業を専属で担当する職員を配置し、事業支援と学内調整を行っている。また、本学とアフリカ7大学の合同・個別会議を通じて、スムーズな学生交流のための日程・時間調整等を行うとともに、派遣・受入学生の安全を確保するため各国の治安・感染症等の情報を収集する体制を構築している。
【特に優れた取組】 事業実施部会に、アフリカとの連携実績のある教員が参画しており、アフリカから5名の学生を半年間受け入れる際も、適切な受け入れ体制を整えることができた。前年度（2021年度）から2022年度にかけザンビア大学に本学の学生を10カ月間派遣する際も、これまでの連携実績に基づき、円滑な派遣を実施することができた。また、翌債予算を活用して本学の学生10名をザンビア・エジプトに短期派遣するにあたり、事前に教職員が現地を訪問し、受入体制や安全面を十分に確認した上で実施したことから、滞りなく安全にプログラムを実施することができた。
④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 プログラム専用のウェブサイトの日英2言語で開設し、国内外に広く本事業の進捗・成果を発信した。2022年10月には学内の留学促進イベント「留学WEEK」において本事業の紹介、アフリカへの留学について説明した。また、2022年12月には国際交流イベント（アフリカン・サタデー）にてブースを出展し、エジプト・ザンビア・マラウイの国情、本事業の内容等について紹介した。また、2022年12月には、受け入れていた5名を含むアフリカ学生向けにキャリア・セミナーも開催し、民間企業との連携を促進した。
【特に優れた取組】 専用ウェブサイトでの発信に加え、学内誌での事業紹介、「留学WEEK」や国際交流イベントを通じ、本事業の取り組みを積極的に紹介、周知することができた。ザンビア・エジプトへの短期派遣は定員10名に対し、21名もの応募があり、学生間でのアフリカへの関心の高さが窺えた。また、キャリア・セミナーでの民間企業との交流を通じ、アフリカからの学生の日本企業に対する理解促進、関心向上につなげることができた。

(2) 特記すべき成果

年度計画（98名）を上回る107名の学生交流を実現し、本学の国際化に貢献することができた。エジプト・ザンビア・マラウイ各国の大学関係者と対面で会議を行ったことで、本学の国際展開、本事業の実施と今後の計画について、より深い理解を得ることができた。広報活動を通し、本事業の取り組みを広く周知し、アフリカに対する関心を喚起することができた。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

COIL型教育では、時差等を考慮し、講義を録画し共有することで、ライブで参加できなかった学生も自習し、キャッチアップできるようにしている。また、グループワークの際には、原則、TAを各グループに1名配置し、グループ内バランスを考慮することで、専門分野、英語力等が異なるグループメンバーが、お互い支え合い、学び合える環境作りに努めている。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	42 人	42 人	42 人	42 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	42 人	42 人	42 人	42 人
30日未満	A (学部生)	0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満	A/B (学部生または大学院生)	0 人	26 人	26 人	26 人	26 人
3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	6 人	6 人	6 人	6 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上	A/B (学部生または大学院生)	0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		0 人	42 人	42 人	43 人	43 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	42 人	42 人	43 人	43 人
30日未満		0 人	10 人	10 人	10 人	10 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	26 人	26 人	26 人	26 人
3ヶ月以上		0 人	6 人	6 人	7 人	7 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		0 人	28 人	21 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン	0人	1人	10人	0人	0人
	ハイブリッド	0人	27人	11人	0人	0人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	27 人	21 人	0 人	0 人
30日未満	A (学部生)	0 人	0 人	10 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満	A/B (学部生または大学院生)	0 人	27 人	11 人	0 人	0 人
3ヶ月以上	A (学部生)	0 人	1 人	0 人	0 人	0 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)			66.7%	50.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

2022年度については、水際対策が緩和化されたことを受け、2023年2月25日～3月8日の12日間、翌債予算を活用し、計画とおり10名の学生をザンビアとエジプトの2カ国に派遣した。一方で、3ヵ月以上の派遣は実現しなかった。また、COIL型教育への参加学生数も計画を下回った。理由としては、新型コロナ対策が緩和される中、対面でのコース、プログラムへの参加を優先したり、個人旅行、アルバイト等でより忙しくなった学生が多かったためと思われる。今後は3ヵ月以上の派遣、COIL型教育への参加を促進すべく、広報活動にもより注力していく。

【特に優れた取組】

ザンビア・エジプトへの短期派遣では、協定校での講義、交流に加え、JICA事務所・事業地の訪問も実施することで、短期間ながらアフリカの多様性・複雑性を実感・理解する機会を与えることができた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計3			8	人	56	人	56	人	56	人	56	人
単位取得を伴う受入学生数			0	人	8	人	8	人	8	人	8	人
	30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0	人	8	人	8	人	8	人	8	人
上記以外の受入学生数			8	人	48	人	48	人	48	人	48	人
	30日未満	B (大学院生)	8	人	8	人	8	人	8	人	8	人
	30日以上3ヶ月未満	A/B (学部生または大学院生)	0	人	40	人	40	人	40	人	40	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

●海外相手大学追加調書分

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計4			0	人	0	人	0	人	6	人	6	人
単位取得を伴う受入学生数			0	人	0	人	0	人	1	人	1	人
	30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	1	人	1	人
上記以外の受入学生数			0	人	0	人	0	人	5	人	5	人
	30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	5	人	5	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

●合計人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (C=小計3+4)			8	人	56	人	56	人	62	人	62	人
単位取得を伴う受入学生数			0	人	8	人	8	人	9	人	9	人
	30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	8	人	8	人	9	人	9	人
上記以外の受入学生数			8	人	48	人	48	人	53	人	53	人
	30日未満		8	人	8	人	8	人	8	人	8	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	40	人	40	人	45	人	45	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

② 外国人学生数の実績

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度			2024年度		
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (D)			13	人	59	人	86	人	0	人	0	人	0	人
実渡航	オンライン	ハイブリッド	13	人	0	人	59	人	5	人	81	人	0	人
単位取得を伴う受入学生数			0	人	0	人	4	人	0	人	5	人	0	人
	30日未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上	A/B (学部生または大学院生)	0	人	0	人	4	人	0	人	5	人	0	人
上記以外の受入学生数			13	人	0	人	55	人	0	人	81	人	0	人
	30日未満	A/B (学部生または大学院生)	13	人	0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日以上3ヶ月未満	A/B (学部生または大学院生)	0	人	0	人	55	人	0	人	81	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)			162.5%		105.4%		153.6%		0.0%		0.0%		0.0%	

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

水際対策が緩和されたことを受け、2022年度は、5名の学生（ザンビア人3名、エジプト人2名）をアフリカから半年間受け入れた。COIL型教育には、計画を大きく上回る学生がアフリカから参加し、修了した。時差、インターネット接続等の問題が生じることもあったが、多様な文化的背景を持つ学生がオンラインで繋がり、グループワークを行うことで、学生の主体性、モチベーション維持・向上に努めた。

【特に優れた取組】

5名の受入学生は全員初来日で、当初は生活面で戸惑うことも多かったが、本学の学生がサポートすることで、学生生活にもスムーズに慣れることができた。また、来日前に2か月間、オンラインで日本語の基礎を学んだことで、カルチャーショックを軽減化することができた。COIL型教育では、原則、グループ毎に1名のTAを起用することで、多様な学生がスムーズにチームとして協働学習し易い環境を作った。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

単位互換を実施する海外相手大学数	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	0	0	2	6	2	6	2	6	2	6

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：広島大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ザンビア大学	認定者数 B (大学院生)	0	4	4	4	4
	認定単位数 B (大学院生)	0	32	32	32	32
マラウイ大学	認定者数 B (大学院生)	0	2	2	2	2
	認定単位数 B (大学院生)	0	16	16	16	16
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	6	6	6	6
年度別認定単位数合計		0	48	48	48	48

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

単位互換を実施した海外相手大学数	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	0	0	1	0	0	0				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：広島大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ザンビア大学	認定者数 A (学部生)	0	1	0		
	認定単位数 A (学部生)	0	6	0		
マラウイ大学	認定者数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数 B (大学院生)	0	0	0		
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	1	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	6	0	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）
令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	長崎大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	ケニア共和国		
事業名	【和文】	プラネタリーヘルスの実現に向けた日ア戦略的共同教育プログラム		
	【英文】	Planetary Health Africa-Japan Strategic and Collaborative Education (PHASE) Program		
事業責任者 <small>※交替年月日は変更があった場合のみ記入</small>	(氏名)	川上 純	(所属・職名) 医歯薬学総合研究科・研究科長	
	(交替年月日)			
海外相手大学追加調査分 相手大学名 <small>※追加調査を提出した大学のみ記入</small>	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
	10			
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL <small>※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用</small>				
https://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/phase-program/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

<p>本事業における<u>2022年度</u>の取組内容について記入してください。</p>
<p>(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望</p>
<p>①交流プログラムの内容</p> <p>(1)ケニア側連携4大学・機関との交流協定に基づき、本学全学から選考された大学院生4名及び学部生1名を、長期研修プログラムにより派遣し、派遣先大学・機関及び本学の指導教員による指導のもと研究活動を遂行した。各学生には所属研究科及び学科でそれぞれ単位が付与された。また、長期研修プログラムによりケニア側連携4大学・機関から各2名計8名の学生が来日し、各学生の専門に沿ってマッチングされた本学の指導教員のもと、約6ヶ月間の研究活動を遂行した。プログラム修了時には報告会を実施し、修了証が授与された。また、研修期間中には、水処理関連の事業を展開する企業を訪問し、事業内容の説明を受け、工場見学するなど日本企業を体験した。(2)本学全学から11名、ケニア側連携4大学・機関から各3名計12名が参加し、オンライン交流プログラムを実施した。日ケの学生がペアとなって活動し、文化の多様性や異文化交流の重要性を理解した。また、プラネタリーヘルスの問題に関心を持つことの重要性についても共有することができた。(3)オンライン交流プログラム参加者から本学学生5名及びケニア学生4名が参加し、短期研修プログラム(ケニアフィールド)を実施した。現地では日ケの学生が共にへき地を訪れ、医療や教育の現場を視察した。また、生活を体験するなど現地の人々との交流も行った。プログラム修了時には日ケ学生が協働して課題を抽出、解決策を発表し修了証が授与された。(4)第3回PHASEプログラム日ケ運営委員会を開催した。ケニア側連携大学・機関とプログラムの実施状況を共有し、今後の学生交流に向けた協議を進め、交流プログラムの実施時期・プログラム内容について合意した。</p>
<p>【特に優れた取組】</p> <p>本学から大学院生4名と学部生1名をケニアに長期派遣できたこと、ケニアからも8名の学生が6ヶ月間の研究活動に来日したこと、オンライン交流プログラムに日ケ学生23名が参加し、プラネタリーヘルスの問題についての意見交換したこと、同交流プログラムに参加した両国の学生9名がケニアの辺縁地に赴き、検討内容を実際に確認したこと(短期交流プログラム)が挙げられる。</p>
<p>②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成</p> <p>(1)第3回PHASEプログラム日ケ運営委員会を3月に開催した。ケニア側連携大学・機関とプログラムの実施状況を共有し、今後の学生交流に向けた協議を進め、交流プログラムの実施時期・プログラム内容について合意した。(2)ケニア中央医学研究所大学院とのダブルディグリープログラム設置に向けた調査及び具体的な協議を開始した。(3)本学の正規課程修了生で構成するアフリカ長崎アルムナイネットワーク設立のための準備を開始した。同ネットワークによる外部評価委員会を構築し、本事業の評価・改善に繋げる。</p>
<p>【特に優れた取組】</p> <p>日ケ運営委員会によりプログラムの評価を行い、計画の合意に至ったこと。ケニア中央医学研究所大学院とのダブルディグリープログラム設置に向けた協議を開始したこと、アフリカ長崎アルムナイネットワーク設立のための準備を開始したことが挙げられる。</p>
<p>③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備</p> <p>(1)参加学生がJASSO等の支援を受け、学業に専念できる環境を整えた。(2)外国人学生の受入時には、本学留学生や研究者を対象とした国際交流会館を準備し、安全かつ利便性のよい施設に入居し安定した生活環境を提供した。(3)メッセージアプリを導入し、受入及び派遣学生、本学ケニア拠点及びプログラム事務局の間で24時間リアルタイムで情報を共有し、危機管理及びフォローアップができる環境を整え活用した。</p>
<p>【特に優れた取組】</p> <p>JASSO等の支援により学業に専念できる環境を整えたこと、ケニアからの学生には国際交流会館への入居により安定した生活環境を提供できたこと、メッセージアプリにより危機管理及びフォローアップができる環境を整え活用した。</p>
<p>④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及</p> <p>(1)本事業の日本語版及び英語版のホームページを継続的に整備し、最新の情報を発信している。(2)ダブルディグリープログラム設置に向けてケニア側連携機関と具体的な協議を開始した。</p>
<p>【特に優れた取組】</p> <p>ダブルディグリープログラム設置に向けてケニア側連携機関と具体的な協議を開始したこと。</p>

(2) 特記すべき成果

(1)長期研修プログラム(受入)を開始: 2022年度は、コロナ禍により前年度受入れができなかった学生4名を含めケニア側連携4大学・機関から各2名計8名のケニア学生を受入れ、約6ヶ月間の研修を実施した。修了時には報告会を実施し修了証が授与された。2023年度も4月から新たにケニア側連携4大学・機関各1名計4名のケニア学生を受入れ、1年/6ヶ月間の研修を開始している。(2)相手大学との協議によるプログラム運営: ケニア側連携4大学・機関とZoom会議を開催・協議して本プログラムを遂行することが、各校からの各プログラムへの積極的な参加の基盤となった。さらにダブルディグリープログラム設立に向けて単位制度、教育課程や修了要件などの情報を収集し、ケニア側と具体的な協議を開始し調整を続けている。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

コロナ禍により実渡航できなかったプログラムはないが、オンライン交流プログラムにおいては、Zoomの機能を最大限に利用して、教員と学生、学生同士においても双方向のコミュニケーションを積極的にとることができた。また、チャット機能も併用して進めることで、質問や不明点の確認がスムーズに実施された。さらに、ブレイクアウトルームを設定し、日本とケニアの学生が少人数のグループに分かれてセッションを行い、協働して成果を発表することができた。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計2			4	人	7	人	12	人	12	人	12	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	3	人	8	人	8	人	8	人
	30日未満	A (学部生)		人		人	5	人	5	人	5	人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上	B (大学院生)		人	3	人	3	人	3	人	3	人
上記以外の派遣学生数			4	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日未満	A (学部生)	4	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●海外相手大学追加調書分

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計2			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日未満			人		人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人
上記以外の派遣学生数			0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	30日未満			人		人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満			人		人		人		人		人
	3ヶ月以上			人		人		人		人		人

●合計人数

		学生別	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (A=小計1+2)			4	人	7	人	12	人	12	人	12	人
単位取得を伴う派遣学生数			0	人	3	人	8	人	8	人	8	人
	30日未満		0	人	0	人	5	人	5	人	5	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	3	人	3	人	3	人	3	人
上記以外の派遣学生数			4	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日未満		4	人	4	人	4	人	4	人	4	人
	30日以上3ヶ月未満		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人
	3ヶ月以上		0	人	0	人	0	人	0	人	0	人

② 日本人学生数の実績

		学生別	2020年度		2021年度			2022年度			2023年度			2024年度		
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)			12	人	22	人	21	人	0	人	0	人	0	人	0	人
実渡航	オンライン	ハイブリッド	12	人	6	人	16	人	0	人	10	人	11	人	0	人
単位取得を伴う派遣学生数			6	人	3	人	12	人	0	人	5	人	5	人	0	人
	30日未満	A (学部生)	6	人		人	10	人		人	5	人		人		人
	30日未満	B (大学院生)	0	人		人	2	人		人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満	A (学部生)		人		人		人	1	人		人		人		人
	30日以上3ヶ月未満	B (大学院生)		人		人		人	3	人		人		人		人
	3ヶ月以上	B (大学院生)		人	3	人		人	1	人		人		人		人
上記以外の派遣学生数			6	人	3	人	4	人	0	人	5	人	6	人	0	人
	30日未満	A (学部生)	4	人		人	3	人		人	4	人	3	人		人
	30日未満	B (大学院生)	2	人		人	1	人		人	1	人	3	人		人
	30日以上3ヶ月未満	A (学部生)		人		人	1	人		人		人		人		人
	3ヶ月以上	A (学部生)		人		人	1	人		人		人		人		人
	3ヶ月以上	B (大学院生)		人	1	人		人		人		人		人		人
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)			300.0%		314.3%			175.0%			0.0%			0.0%		

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

実渡航、オンラインいずれのプログラムも達成目標を上回る学生を派遣することができた。また、単位取得を伴う派遣学生数についても目標を達している。今後は、今年度初めて実施することができた短期研修プログラム（ケニアフィールド）において、学生の所属部局における単位付与を可能となるよう内容をさらに検討していく。

【特に優れた取組】

本事業は、主管部局を医歯薬学総合研究科が務め、全学的なプラネタリーヘルス事業として展開されている。そのため、全学からの学生の参加を求めている。2022年の交流プログラムには、経済学、多文化社会学、情報データ科学、工学などの分野で、医歯薬系以外の学部生や大学院生も多く参加し、プラネタリーヘルスをアフリカとの交流から学ぶことができた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3			4 人	8 人	12 人	12 人	12 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	4 人	8 人	8 人	8 人
	30日未満	A (学部生)	人	人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数			4 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日未満	A (学部生)	4 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
	3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●海外相手大学追加調書分

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日未満		人	人	人	人	人
	30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
	3ヶ月以上		人	人	人	人	人
上記以外の受入学生数			0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日未満		人	人	人	人	人
	30日以上3ヶ月未満		人	人	人	人	人
	3ヶ月以上		人	人	人	人	人

●合計人数

			2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)			4 人	8 人	12 人	12 人	12 人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	4 人	8 人	8 人	8 人
	30日未満		0 人	0 人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数			4 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日未満		4 人	4 人	4 人	4 人	4 人
	30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)			12 人	21 人	20 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン	ハイブリッド	12人	0人 21人 0人	8人 12人 0人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う受入学生数			0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
	30日未満		人	人 人 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人
	30日以上3ヶ月未満		人	人 人 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人
	3ヶ月以上		人	人 人 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人
上記以外の受入学生数			12 人	0 人 21 人 0 人	8 人 12 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
	30日未満	A (学部生)	7 人	人 17 人 人	人 8 人 人	人 人 人	人 人 人
	30日未満	B (大学院生)	5 人	人 4 人 人	人 4 人 人	人 人 人	人 人 人
	30日以上3ヶ月未満		人	人 人 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人
	3ヶ月以上	B (大学院生)	人	人 人 人	8 人 人 人	人 人 人	人 人 人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)			300.0%	262.5%	166.7%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

実渡航、オンラインいずれのプログラムも達成目標を上回る学生を受入れることができた。今後はケニア側連携大学・機関における単位認定の条件の確認と単位付与について協議をさらに進める。

【特に優れた取組】

ケニアから8名の長期交流プログラム参加学生を6か月間、複数の部局（多文化社会学研究科、経済研究科、熱帯医学・グローバルヘルス研究科、水産・環境科学研究科、医歯薬総合研究科）に受け入れ、長崎大学におけるプラネタリーヘルスを基盤として、専門教育を施すことができた。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数									1	1

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：長崎大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ケニア中央医学研究所 (KEMRI)	認定者数					1
	認定単位数					2
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	1
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	2

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数										

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名	学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	東京農業大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	タンザニア、ケニア		
事業名	【和文】	アフリカの栄養改善活動をフィールドとする協働実践型教育プログラム		
	【英文】	Project-based Collaborative Education Program focusing on Nutrition Improvement in Africa		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった 場合のみ記入	(氏名)	三原真智人	(所属・職名) グローバル連携センター長 教授	
	(交替年月日)	令和3年4月1日		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した 大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用				
https://www.tenkai.nodai.ac.jp/				

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における <u>2022年度</u> の取組内容について記入してください。
(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望
①交流プログラムの内容 2022年度は、国際移動に際しての水際対策が徐々に緩和され、8月以降実渡航を伴うプログラムを実施した。国際教育プログラムComprehensive International Education Program (CIEP)と世界学生サミット (ISS)を開催し、参画校からそれぞれ短期・長期学生を受け入れた。また、本学学生が参画校での留学を開始し、授業履修に加え、現地日本企業でのインターンシップを行った。課題解決力醸成ワークショップ、African Caféを対面で実施し、オンラインによるOnline Exchange、Online Courseはハイブリッドを組み合わせて実施した。2～3月にかけてはケニア短期派遣プログラムを実施し、3月には、長期交換留学生としてJKUATの学生を受け入れた。
【特に優れた取組】 プログラムの全面オンライン実施からハイブリッド、対面へとスムーズに移行することができた。CIEPでは、農大生と協定校学生が協働し世田谷キャンパスでの講義・演習、世界農業遺産に指定されている石川県能登地域における農業実習に参加し、農業組合、女性の活躍、6次産業化などを実践的に学ぶことができた。
②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 各参画校の担当者と意見交換を行うCoordinator's Meetingを年8回実施し、活動に伴う課題等を共有しながら議論を重ねた。また、11月～12月には現地へ調査団を派遣し、プログラムの打ち合わせ及び短期派遣の事前視察を行った。さらに、年度末には合同モニタリング会議を実施し、令和4年度実績及び令和5年度計画についての確認・意見交換を行い、事業についての認識を共有する場を設けた。
【特に優れた取組】 綿密な協議を重ねて行うことで、プログラムが詳細化し、短期、長期の派遣・受入が順調に行われた。良好な関係づくりにより、今後の事業進捗の円滑化が期待される。
③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 本学学生を対象にAfrican Caféを実施し、来日中のアフリカの学生との交流会を実施し、アフリカの理解を深める機会を提供した。また、アフリカ協定校学生とのOnline Exchangeでは、小グループセッションを設け、日本文化やケニアの食文化をテーマに、学生が直接対話する機会を設けた。ISSの受入前プログラムとしてPreSummitを、CIEP受入前プログラムとしてオンライン事前オリエンテーションを実施した。長期留学での受入前プログラムとしてオンデマンド初級日本語講座を実施した。本学学生の派遣前には、危機管理専門日本アイラック社より危機管理対策の講義を実施した。
【特に優れた取組】 本学学生が長期留学する前に、タンザニア出身研究員をチューターとした事前学習（スワヒリ語習得、生活・文化面の理解）を行い、後学期からの留学に備えた。ISSおよびCIEPの受入前プログラムをオンラインで実施したことで、プログラム内容の詳細説明、日本の自然環境・農業についての基本的な理解の醸成、持ち物・服装など旅行準備に必要な情報提供を行うことができ、来日後のスムーズなプログラム実施に繋げることができた。
④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 京都大学・東京外国語大学共催第2回 日本・アフリカ大学教育交流ミーティング（兼2022年度TICADVIIIサイドイベント）（8月24日）及び、IFAD主催"TICAD8 High-Level Side Event"（9月30日）に、本事業推進責任者であるグローバル連携センター長が登壇し、事業紹介、本学のアフリカにおける協力の取り組みの紹介を行った。また、SNSツール（Line、Twitter、Instagram）を活用し、情報配信強化を図った。
【特に優れた取組】 TICADは、アフリカ諸国の開発に関心を持つ機関や個人が国籍を超えて集う機会であり、オンラインではあったものの、サイドイベントで本学の取り組みを紹介することで、多くの国・地域の高等教育関係者、民間企業、国際機関等に対し、本学の取り組みを周知することができた。

(2) 特記すべき成果

課題解決力醸成ワークショップを短期派遣プログラムの派遣前プログラムという位置付けをより強く打ち出し、参加者を募ったところ、短期派遣プログラム参加者16名のうち、11名がワークショップの参加経験者となり、事前学習と現場での実践的学習が直接的にリンクする流れを構築することができた。ISS、CIEPに合わせて2ヶ月間受け入れた4名のうち学部4年生であった3名は、本学教員の指導の下、更に学びを深めることを希望し、本学独自の奨学金制度「特別留学生制度」を利用し、2023年4月から本学大学院博士前期課程に正規留学生として入学するに至っている。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

2022年9月に、第22回「食と農と環境を考える世界学生サミット(ISS)」をハイブリッドで開催した。時差に配慮し、プログラムをMorning SessionとEvening Sessionの2時間帯に分け、各参加者が時間的な負荷なく参加できるよう工夫した。インターネット接続が安定しない地域から参加する学生も少なくなかったため、事前にプレゼンテーション動画をe-learningプラットフォーム上に掲載し、事前視聴とコメント投稿を可能な状態とした。これによりISS当日はプレゼンテーション時間を大幅に省略し、ライブでの時間を実討論に振り向けられるよう工夫した。また、e-learningプラットフォームは、ケニア、タンザニアでも動作確認がされているGoocusを採用しSUA、JKUATの学生も負荷少なく学習ができるよう配慮した。さらに、Slackを活用し、ISS専用ワークスペースを作成し、グループ毎のチャンネルを用意したことで、オンラインであっても参加者間がスムーズにコミュニケーションを取ることができる場となり、グループ毎の準備が円滑に行われた。ISS本番2カ月前には、オンラインでプレサミットを開催し、ISS本番までの流れ、修了要件、オンラインツールの利用方法などを説明するオリエンテーションを実施した。加えて、ISS参加者、協定校関係者への情報共有をスムーズに行うため、ISS専用のポータルサイトを立ち上げた。サイト上では、参加者の紹介、要旨集の掲載に加え、プレゼンテーション動画やグループディスカッションYouTube配信へのリンクを貼るなどし、ISSに係る情報をより広く発信するポータルサイトとして活用した。ISS2022ポータルサイト：

<https://www.isstokyonodai2022.com/>

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		10 人	51 人	51 人	51 人	51 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	17 人	17 人	17 人	17 人
30日未満		0 人	15 人	15 人	15 人	15 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	2 人	2 人	2 人	2 人
上記以外の派遣学生数		10 人	34 人	34 人	34 人	34 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		10 人	34 人	34 人	34 人	34 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		10 人	51 人	51 人	51 人	51 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	17 人	17 人	17 人	17 人
30日未満		0 人	15 人	15 人	15 人	15 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	2 人	2 人	2 人	2 人
上記以外の派遣学生数		10 人	34 人	34 人	34 人	34 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		10 人	34 人	34 人	34 人	34 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		0 人	41 人	64 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド	0人	0人 41人 0人	19人 45人 0人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人 7 人 0 人	19 人 20 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上				3 人		
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人 34 人 0 人	0 人 25 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)		0.0%	80.4%	125.5%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

日本人学生派遣実績の内訳は、以下のとおりである。

- ・2021年度は全面オンラインであったが、課題解決力醸成ワークショップ23名、ISS7名、Online Course1名、PCM研修10名が修了した。
- ・2022年度は、課題解決力醸成ワークショップ25名、CIEP17名、ISS3名、実渡航が再開し、長期派遣3名、短期派遣16名であった。

【特に優れた取組】

これまでアフリカの関心を喚起することを目的としたAfrican Caféには延べ295名、協定校学生とのOnline Exchangeには延べ391名が参加するに至っている。こうした積み重ねにより、アフリカに関心を持つ層が徐々に拡大している。2022年度春期に実施したJKUATへの短期派遣プログラムには、定員16名に対し27名が応募するに至り、アフリカに対する関心の高さが窺えた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3		10 人	33 人	33 人	33 人	33 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	11 人	11 人	11 人	11 人
30日未満			7 人	7 人	7 人	7 人
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上			4 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数		10 人	22 人	22 人	22 人	22 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満		10 人	22 人	22 人	22 人	22 人
3ヶ月以上						

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)		10 人	33 人	33 人	33 人	33 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	11 人	11 人	11 人	11 人
30日未満		0 人	7 人	7 人	7 人	7 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		0 人	4 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数		10 人	22 人	22 人	22 人	22 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		10 人	22 人	22 人	22 人	22 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)		0 人	43 人	51 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド	0 人	0 人 43 人 0 人	13 人 38 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人 12 人 0 人	13 人 2 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満				6 人 2 人		
30日以上3ヶ月未満				4 人		
3ヶ月以上				3 人		
上記以外の受入学生数		0 人	0 人 31 人 0 人	0 人 36 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満				36 人		
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
達成目標に対する実績の割合 (D/C)		0.0%	130.3%	154.5%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

外国人学生受入実績の内訳は、以下のとおりである。

- ・2021年度は、全面オンラインで実施し、ISSに12名、Online Course30名、PCM研修1名が修了した。
- ・2022年度は、CIEP/ISSに短期受入で6名、長期で4名、さらにISSにはオンライン2名が参加した。12月から実施したOnline Courseでは、36名が修了し、3月から長期留学生3名を受入た。

【特に優れた取組】

協定校学生を対象としたOnline Courseでは、11月～12月にケニアに派遣した事前調査団がJKUATで対面によるオリエンテーションを実施し、オンデマンド講義に加え、ケニアのBiodiversity専門家がJKUATに赴き、ハイブリッド講義を行った。さらに、最終回には、ケニアに短期派遣中の本学学生（16名）が参加し、修了式では短期派遣を引率した東京農業大学の教員が直接、JKUAT学生に修了書を手渡した。部分的ではあったが、オンラインコース参加者と対面で交流することができた。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 東京農業大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ソコイネ農業大学	認定者数	A/B (学部生または大学院生)	0	1	1	1	1
	認定単位数	A/B (学部生または大学院生)	0	4	8	8	8
ジョモケニヤッタ農工大学	認定者数	A/B (学部生または大学院生)	0	1	1	1	1
	認定単位数	A/B (学部生または大学院生)	0	4	8	8	8
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	2	2	2	2
年度別認定単位数合計			0	8	16	16	16

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数	0	0	2	2	2	2				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 東京農業大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ソコイネ農業大学 / ジョモケニヤッタ農工大学	認定者数	A (学部生)	0	7	20		
	認定単位数	A (学部生)	0	14	74		
ソコイネ農業大学	認定者数	A (学部生)	0	0	2		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	11		
ジョモケニヤッタ農工大学	認定者数	A (学部生)	0	0	17		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	53		
年度別認定者数合計			0	7	39	0	0
年度別認定単位数合計			0	14	138	0	0

2. 国内連携大学 【大学名： 大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
	認定者数						
	認定単位数						
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）
令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	○京都大学、東京外国語大学			
主たる交流先	アフリカ諸国	アディスアベバ大学（エチオピア）、カイロ大学（エジプト）、マケレレ大学（ウガンダ）、ソコイネ農業大学（タンザニア）、キンシャサ大学（コンゴ民）、ガーナ大学（ガーナ）、アンタナナリヴ大学（マダガスカル）、ザンビア大学（ザンビア）、ボツワナ大学（ボツワナ）、ヤウンデ第1大学（カメルーン）、ジョモケニアッタ農工大学（ケニア）、プレトリア大学（南アフリカ）、ステレンボッシュ大学（南アフリカ）、プロテスタント人文社会科学大学（ルワンダ）		
事業名	【和文】	アフリカにおけるSDGsに向けた高度イノベーション人材育成のための国際連携教育プログラム		
	【英文】	Innovative Africa: Educational Networking Programs for Human Resource Development in Africa's SDGs		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった場合のみ記入	(氏名)	高橋 基樹	(所属・職名) 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	
	(交替年月日)	2022年4月1日		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した大学のみ記入	大学名		国名	
		(日本語表記)		(英語表記)
	1	シェイク・アンタ・ジョップ（ダカール）大学	Cheikh Anta Diop University of Dakar	セネガル共和国
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
10				

大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL
※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用

<https://iafp.africa.kyoto-u.ac.jp>
<http://www.tufs.ac.jp/iafp/>

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。
(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望
①交流プログラムの内容 ・京都大学では短期留学として、学生13名(8カ国)を受け入れ、全員が修了した。派遣では短期・長期留学として、本事業交流相手大学先のアフリカ8カ国へ35名を派遣し、フィールドワークを基盤としたプログラムを実施した。国際合同コンフェレンスでは、計55名が参加し、受入学生13名、他5名が研究発表を行った。 ・東京外国語大学では、長期留学(実渡航)として、3カ国へ5名を派遣し、3カ国から6名を受け入れた。短期留学(実渡航)として、1カ国へ1名を派遣した。また、短期留学(オンライン)として、派遣では学生7名が単位取得、受入では3カ国7名が修了した。国際合同コンフェレンスでは、11月に東京で開催し63名が参加、4カ国から学生12名が発表し、さらに3月にガーナで開催し100名が参加、6カ国から学生16名が発表した。
【特に優れた取組】 ・両大学ともに、アフリカから渡航後は、各大学での集中講座、企業等の視察、国際合同コンフェレンスなどを通じ、多様な学問分野にて個別指導や実地調査を基盤とした教育プログラムを実施し、オンライン形式(日本語基礎講座やスタディツアー)と対面形式の学習機会を相補的に組合せることが出来た。
②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 ・京都大学では、担当教員をアディスアベバ大学に派遣し、単位互換やコチュテルの制度化に向けた協議を行い、新たにダカル大学とも部局間学生交流協定を締結した。また、両大学ともアフリカの各大学の教員と協議し、シラバス、単位認定、成績管理の方法について対面で意見交換を行った。
【特に優れた取組】 ・日本側とアフリカ側の教員との対面での個別の意見交換が進んだことにより、実際の運用開始を前提として、個々の大学の事情に即した形でのシラバス、単位認定、成績管理に関する意見交換を行うことができた。
③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 ・京都大学では、教員・事業雇用研究員の計13名が計29回アフリカ諸国の協定校・関連組織に渡航し、2022年度から実渡航を伴う交流プログラムに向け、連携体制を整備した。その結果、4月には派遣・受入を希望する学生の公募を速やかに実施し、日本学生支援機構(JASSO)の協定派遣・受入制度の奨学金を利用し渡航できた。 ・東京外国語大学では、教員が9月に南アフリカのステレンボッシュ大学・プレトリア大学および大使館から得た現地情報を基に留学説明会を実施し、次年度以降の派遣学生に情報を提供した。また次年度の南アフリカ派遣予定学生を対象に詳しい情報提供と受入大学国際局職員との仲介を行い、学生の円滑な留学準備を支援できた。
【特に優れた取組】 ・健康・危機管理の対策のため、実渡航を伴う学生の派遣・受入事業で健康管理カルテ関連のシステム活用や各種オンライン手段によるアクセスを確保し、学内部署などと連携して、学生の安全健康の確認を常時行った。
④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 ・京都大学では、アフリカ研究実績が豊富で英語に堪能な特定研究員2名、英語対応可能な事務補佐員1名、東京外国語大学ではアフリカ研究実績が豊富で英語に堪能な特任助教1名を継続雇用し、国際的体制を整備した。 ・2022年度も日本・アフリカ大学連携ネットワーク(JAAN)と組織的に連携し、本事業の情報共有やイベントの案内、教育交流事業の好事例の紹介等を積極的に発信し、アフリカに関心のある国内大学と情報共有した。
【特に優れた取組】 ・2022年8月にTICADVIIIサイドイベント「日本アフリカ大学教育交流の新天地-日本・アフリカ大学教育交流ミーティング2022-」を開催し、日本から20大学(うち新規参加10大学)、アフリカから14大学(うち新規参加4大学)、その他17団体から計119名が参加し、アフリカと日本の大学関係者及び学生など様々な参加者の間で活発な交流を行った。

(2) 特記すべき成果

両大学とも、アフリカの学生には予備的教育をオンラインで実施し、渡航後は、集中講座、企業等の視察、国際合同コンフェレンスを通じ、個別指導や実体験を基盤とした教育プログラムを提供した。両大学の日本人学生も、アフリカ各国の協定校に渡航し、各校の窓口教員が、授業や調査を適切に指導し、各学生が探求する研究課題を補助した。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

- ・京都大学では、アフリカの学生を対象とした「日本語基礎講座」を9月から電子媒体の教科書を用いてオンラインで実施し、日本に渡航後に実施される対面授業への準備として日本語の基礎を学べる段階を設けた。また、電子媒体の教科書を利用したことにより、アフリカの学生が渡航前から自主的に日本語を学べる環境を提供することができた。
- ・東京外国語大学では、秋学期(10月-2023年1月)にアフリカ協定校の教員を招いたリレー講義"Connect with Africa"を実施した(受講生33名)。冬学期(2023年2月)にはルワンダのプロテスタント人文社会科学大学 (PIASS) とつなぎ、COIL型授業"Conflict and Peacebuilding in Africa"を実施した(東外大受講生7名)。COIL型授業を受講した学生は毎回PIASSとつなぎ、ブレイクアウトセッションを利用したディスカッションを通じて相互に学びながら平和構築について学習することができた。

2. 交流学生数の実績等【(1)と(2)は各3ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	12 人	16 人	16 人	16 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	3 人	3 人	4 人	4 人
	30日未満					
	30日以上3ヶ月未満					
	3ヶ月以上	0 人	3 人	3 人	4 人	4 人
上記以外の派遣学生数		0 人	9 人	13 人	12 人	12 人
	30日未満					
	30日以上3ヶ月未満	0 人	9 人	13 人	12 人	12 人
	3ヶ月以上					

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計2		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
	30日未満					
	30日以上3ヶ月未満					
	3ヶ月以上				1 人	1 人
上記以外の派遣学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日未満					
	30日以上3ヶ月未満					
	3ヶ月以上					

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (A=小計1+2)		0 人	12 人	16 人	17 人	17 人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	3 人	3 人	5 人	5 人
	30日未満	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日以上3ヶ月未満	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	3ヶ月以上	0 人	3 人	3 人	5 人	5 人
上記以外の派遣学生数		0 人	9 人	13 人	12 人	12 人
	30日未満	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
	30日以上3ヶ月未満	0 人	9 人	13 人	12 人	12 人
	3ヶ月以上	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 日本人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (B=実渡航+オンライン+ハイブリッド)		0 人	38 人	48 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン	0人	3人	41人	0人	0人
	ハイブリッド		35人	7人	0人	0人
単位取得を伴う派遣学生数		0 人	1 人	5 人	0 人	0 人
	30日未満		5 人	7 人		
	30日以上3ヶ月未満					
	3ヶ月以上		1 人	5 人		
上記以外の派遣学生数		0 人	2 人	36 人	0 人	0 人
	30日未満		20 人			
	30日以上3ヶ月未満		10 人	20 人		
	3ヶ月以上		2 人	16 人		
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)			316.7%	300.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

・京都大学では、2022年度に計8カ国35名をアフリカ各国の本事業交流相手大学へ単位取得を伴わず派遣した。内訳は、ケニアへの短期（30日以上3ヶ月未満）5名と長期（3ヶ月以上）3名、エチオピアへの短期1名と長期4名、ボツワナへの短期4名、タンザニアへの長期4名、カメルーンへの短期2名と長期4名（うち1名は2023年5月、1名は2023年7月まで渡航予定）、マダガスカルへの短期3名と長期1名、ウガンダへの短期3名、ガーナへの短期1名であった。このうち、2カ国2名（ケニア1名、ボツワナ1名）の派遣については本事業令和4年度補助金によって実施した。また、令和3年度繰越予算およびその他の資金により、計8カ国33名の派遣を実施した。

・一方、東京外国語大学では、実渡航で単位取得を伴う派遣（長期）として、7月から3名（プレトリア大学2名、ザンビア大学1名）、9月から1名（プロテスタント人文社会科学大学[PIASS]）、2023年2月から1名（ザンビア大学）を派遣した。実渡航で単位取得は伴わない派遣（短期、30日以上3ヶ月未満）として、2023年1月から1名（PIASS）を派遣した。オンラインプログラム（短期留学プログラム、30日未満）としては、2023年2月にPIASSとCOIL型授業"Conflict and Peace Building in Africa"を実施し、東外大学生7名が単位を取得した。

【特に優れた取組】

・京都大学では、新型コロナにより実現できていなかった実渡航によるアフリカへの日本人学生の派遣を実施した。昨年度まで世界展開力事業として進めてきたアフリカの各大学との学生交流協定に基づき、本事業交流相手大学への渡航においては、派遣学生への渡航費や滞在費の支援を行うことができた。世界展開力事業以外の予算で渡航した学生に関しても、世界展開力事業で作成した安全情報データベースや健康管理のシステムを活用して、適切なサポートを行うことができた。

・東京外国語大学では、教員の9月の南アフリカ出張後、ステレンボッシュ大学・プレトリア大学および大使館から得た情報を基に南アフリカ留学説明会を実施し、次年度以降の派遣学生に情報提供を行った。また次年度の南アフリカ派遣予定学生を対象に詳しい情報提供と受入大学国際局職員の仲介を行い、学生の円滑な留学準備を支援することができた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計3		2 人	10 人	16 人	16 人	16 人
単位取得を伴う受入学生数		2 人	3 人	4 人	4 人	4 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上		2 人	3 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数		0 人	7 人	12 人	12 人	12 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満		0 人	7 人	12 人	12 人	12 人
3ヶ月以上						

●海外相手大学追加調書分

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小計4		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
単位取得を伴う受入学生数		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上						
上記以外の受入学生数		0 人	0 人	0 人	1 人	1 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満					1 人	1 人
3ヶ月以上						

●合計人数

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (C=小計3+4)		2 人	10 人	16 人	17 人	17 人
単位取得を伴う受入学生数		2 人	3 人	4 人	4 人	4 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
3ヶ月以上		2 人	3 人	4 人	4 人	4 人
上記以外の受入学生数		0 人	7 人	12 人	13 人	13 人
30日未満		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
30日以上3ヶ月未満		0 人	7 人	12 人	13 人	13 人
3ヶ月以上		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

② 外国人学生数の実績

学生別		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
合計人数 (D)		2 人	11 人	26 人	0 人	0 人
実渡航	オンライン ハイブリッド	2人	0人 9人 2人	19人 7人 0人	0人 0人 0人	0人 0人 0人
単位取得を伴う受入学生数		2 人	0 人 0 人 2 人	6 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上		2 人	0 人 人 2 人	6 人 人 人	人 人 人	人 人 人
上記以外の受入学生数		0 人	0 人 9 人 0 人	13 人 7 人 0 人	0 人 0 人 0 人	0 人 0 人 0 人
30日未満						
30日以上3ヶ月未満						
3ヶ月以上		0 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人	人 人 人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)		100.0%	110.0%	162.5%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

・京都大学では実渡航による「短期交流プログラム」（30日以上3ヶ月未満）を2022年10月から12月にかけて実施した。プログラム参加者は、京都大学と本事業交流相手大学に所属する学生計13名（8ヶ国）で、出身校の内訳はタンザニア1名、エチオピア3名、ボツワナ1名、ザンビア3名、マダガスカル2名、カメルーン1名、コンゴ民主共和国1名、ウガンダ1名であった。プログラムでは、学生たちは集中講義・日本語基礎講座・受入教員による個別指導を受けた。集中講義はアフリカのSDGsをテーマとして京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の教員によるリレー形式で実施された。日本語基礎講座は、初学者のクラスと、過去に世界展開力事業の日本語講座の受講者を対象としたクラスとに分けて開講され、実渡航前の8月と9月はオンライン、学生の来日後は対面で実施された。日本語講座の最終回では2クラス合同での日本語でのプレゼンテーションイベントが開催され、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の教職員、院生および、国際高等教育員の教員などが参加した。また、プログラムの一環として京都市動物園、琵琶湖疏水記念館、ダイキン工業淀川製作所、サラヤ株式会社大阪工場での学外見学を実施した。プログラム参加者13名に対し、修了証明書を発行した。

・一方、東京外国語大学では、実渡航を伴う受入（長期留学プログラム、3ヶ月以上）として、4月から1名(プレトリア大学)、10月から5名(ザンビア大学2名、PIASS3名)を受け入れた。オンラインプログラム（短期留学プログラム、30日未満）の受入としては2023年2月に4つのプログラムから構成される「2022年度日本オンライン・スタディツアー」を実施し、すべてのプログラムを修了した3カ国4大学7名に修了証を発行した。プログラムは「Experience Hiroshima Online」(4カ国5大学17名参加)、「Sake Lecture & Virtual Brewery Tour」(4カ国6大学23名参加)、日本アフリカ・オンライン交流会（4カ国5大学26名参加、オンデマンド講義「日本社会の概要」(3カ国4大学15名参加)を提供した。

【特に優れた取組】

・京都大学では、新型コロナの収束に伴い、実渡航による招聘プログラムを実施できた。渡航前にオンラインにて日本語講座を開講したことにより、渡航後の日本の生活を見据えた学習コンテンツを提供できた。集中講義と個別指導では、アフリカのSDGsに関連する研究テーマを選定したアフリカの学生が、各専門分野の知識と地域社会の固有性への理解を深めることができた。学外見学において、京都市動物園と琵琶湖疏水記念館では、生物学と工学を専門とする教員による解説が行われたことで、専門性の高い内容を提供できた。工場見学で訪れたダイキン工業はアフリカで事業展開していることに加えて京都大学と産学連携での研究を進めており、一方のサラヤ株式会社もアフリカでの衛生事業を展開しているという点で、アフリカのSDGs、日本企業のアフリカでの活動、産学連携などのテーマについて深く学べる機会となった。また、工場見学を通じて各企業の関係者と今後のインターン実施について話し合うことができた。12月の修了式ではプログラム参加者13名全員に対し修了証明書を発行した。日本語入門講座ではルーブリックを用いて成績評価を行った上で、2023年1月に成績証明書をオンラインで発行した。

・東京外国語大学が実施した短期留学プログラム（派遣）「日本オンライン・スタディツアー」の「日本アフリカ・オンライン交流会」は東京外国語大学学生7名と特任助教から成るワーキンググループで準備を進めた。ミーティングには、東京外国語大学に留学中のアフリカ人学生も随時参加したことにより、派遣プログラムではあるが東京外国語大学学生にとってアフリカについての知識と学生間の交流を深める機会にもなった。スタディツアーに参加した学生同士の交流は個人レベルで続いており、将来的な教育交流の機会への足がかりになる可能性が期待される。

(3) その他（上記（1）・（2）に該当するもの以外）

●本来実渡航で行うべきところ、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてオンラインで実施した国際教育・交流プログラム **特になし**

開催年月	プログラム名称	参加者数
		人
		人
		人
		人

(4) 本事業における海外相手大学との単位互換の目標と実績

【本事業で計画している海外相手大学との単位互換の達成目標】

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	0	0	0	2	4	4	8	8	9	10

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：京都大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
アディスアベバ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	2	2	2
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	4	4	4
マケレレ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	1	1
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	2	2
ソコイネ農業大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
ジョモケニアアッタ農工大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	1	1
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	2	2
ガーナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	1	1
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	2	2
ヤウンデ第1大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
アンタナナリヴ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	1
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	2
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	1	1	1
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	2	2	2
ボツワナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
キンシャサ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
カイロ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0	0	0
年度別認定者数合計			0	0	3	6	7
年度別認定単位数合計			0	0	6	12	14

【2022年度末における目標の達成状況】

(i) 単位互換を実施した海外相手大学数【実績】

(単位：校)

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施した海外相手大学数	0	1	1	1	0	0				

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【実績】

(単位：認定者数は人、認定単位数は単位)

【派遣した日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名：京都大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
アディスアベバ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
マケレレ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ソコイネ農業大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ジョモケニアアッタ農工大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ガーナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ヤウンデ第1大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
アンタナナリヴ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
ボツワナ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
キンシャサ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
カイロ大学	認定者数	B (大学院生)	0	0	0		
	認定単位数	B (大学院生)	0	0	0		
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

2. 国内連携大学 【大学名：東京外国語大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ガーナ大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	0	0
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	0	0
ザンビア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	0	1
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	0	6
プロテスタント人文・ 社会科学大学	認定者数	A (学部生)	0	0	2	1	1
	認定単位数	A (学部生)	0	0	12	6	6
プレトリア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	1	1	1
	認定単位数	A (学部生)	0	0	6	6	6
ステレンボッシュ大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0	1	1
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0	6	6
年度別認定者数合計			0	0	3	3	4
年度別認定単位数合計			0	0	18	18	24

2. 国内連携大学 【大学名：東京外国語大学】

相手大学名		学生別	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
ガーナ大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
ザンビア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
プロテスタント人文・ 社会科学大学	認定者数	A (学部生)	0	1	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
プレトリア大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
ステレンボッシュ大学	認定者数	A (学部生)	0	0	0		
	認定単位数	A (学部生)	0	0	0		
年度別認定者数合計			0	1	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0

大学の世界展開力強化事業（令和2年度採択）

令和5年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	○京都大学、東京外国語大学		
主たる交流先	アフリカ諸国	アディスアベバ大学（エチオピア）、カイロ大学（エジプト）、マケレレ大学（ウガンダ）、ソコイネ農業大学（タンザニア）、キンシャサ大学（コンゴ民）、ガーナ大学（ガーナ）、アンタナナリヴ大学（マダガスカル）、ザンビア大学（ザンビア）、ボツワナ大学（ボツワナ）、ヤウンデ第1大学（カメルーン）、ジョモケニアッタ農工大学（ケニア）、プレトリア大学（南アフリカ）、ステレンボッシュ大学（南アフリカ）、プロテスタント人文社会科学大学（ルワンダ）	
事業責任者 ※交替年月日は変更があった場合のみ記入	(氏名)	高橋 基樹	(所属・職名) 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
	(交替年月日)	2022年4月1日	
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ウェブサイトにおいて、各事業のリンク先として使用			
https://iafp.africa.kyoto-u.ac.jp http://www.tufs.ac.jp/iafp/			

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で1ページ以内、(3)と(4)で2ページ以内、(5)は1ページ以内】

本事業における2022年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

プラットフォーム構築プログラムの内容

・人材育成プラットフォーム構築プログラムでは、ハイブリッド形式で国内実施校会議を計4回開催し、情報交換をおこなった。また、東京にて「外部評価委員会」（10大学、9実務組織）、「第2回日本アフリカ高度専門人材育成支援委員会」（10大学、9実務組織）、「第2回アフリカ実務組織・大学交流会」（22実務組織、17大学から85名）を開催した。「第2回日本・アフリカ大学教育交流ミーティング」をTICAD8サイドイベントとしてオンライン開催し、日本20大学、アフリカ14大学、その他17団体から計119名が参加した。現段階では、アフリカの教育交流に関心のある大学、企業、政府機関、国際機関との連携体制は構築できたが、今後は本事業で育成された人材にインターンシップや民間採用などの機会提供を行う必要がある。

・情報プラットフォームの強化のため、アフリカの学生と交流実績のある大学・教員を検索できるサイト「日本アフリカ学生交流ポータルサイト」の機能を拡充した。同時に学務情報および安全健康・生活・危機管理情報も同サイトに掲載し、日ア間の留学情報を集約したサイトとした。さらに、京都大学のアフリカに関する動画コンテンツを24件提供することで、JV-Campusの充実にも貢献した。東京外国語大学は、JV-Campusに日本に関するオンデマンド学習教材を11件掲載し、アフリカを含め広く国内外の学生に向けて提供している。現段階では継続的に情報収集を行う体制が整ったが、今後は同ポータルサイトの認知度向上や機能向上に務めていく。

【特に優れた取組】

・日本・アフリカの大学間のマッチングのため、日本の大学との連携を図る南アフリカの関連組織に対し京都大学が積極的に支援を行った。具体的には、ソワネ工科大学が2022年10月に日本を訪問した際に、京都大学が仲介しながら京都先端科学大学、神戸情報大学院大学、芝浦工業大学の訪問をサポートし、後日オンラインで京都精華大学とのミーティングも実施した。また2022年7月には在日南アフリカ共和国大使館 科学イノベーション教育担当公使、9月には駐日南アフリカ共和国大使、10月にはプレトリア大学学長一行が京都大学の執行部を表敬訪問し、2国間における大学間交流の促進について議論した。他にも、アフリカの各種教育研究機関（ケニア中央医療研究所、ヨハネスブルク大学など）からの本学訪問、在外日本大使館への訪問を行い、新たな組織的・人的交流を深めるなど、事業を実施していない大学との連携体制を構築するとともに、情報交換と大学間交流をさらに促進できるようになった。

(2) 特記すべき成果

・人材育成プラットフォーム構築事業では、対面式の会議開催が増えた結果、質・量ともに大学間、組織間の連携を充実化することができた。国内実施会議では、情報交換だけでなく、アフリカでの教育研究交流の実績が豊富な京都大学が、スタートアップ型の宇都宮大学や山口大学から問題点や対策方法について意見交換を持つことができた。対面で開催した「日本アフリカ高度専門人材育成支援委員会」「アフリカ実務組織・大学交流会」では、実渡航を伴う教育プログラムが実現した結果、人材育成の方策や本事業の教育効果についてより具体的な評価を受けるとともに、各組織が名刺交換をしながら交流を深める機会を提供した。「日本・アフリカ大学教育交流ミーティング」についても、TICAD8と合わせることによって、世界展開力の枠組みを超えて多数の日本・アフリカの大学から参加があった。このように、日本とアフリカの大学から新規の参加校を取り入れるプラットフォームを拡充することができた。さらにアフリカの諸大学における教育情報および安全健康、生活、危機管理情報の収集に関して、専用Webサイトの機能を向上させたことにより、今後の現地情報収集・発信を効果的に進め、日・アフリカ双方の学生の留学時の教育内容の確保および安全・安心な渡航の実現に向け、実質的な情報提供を行えるようになった。

(3) オンラインを活用した工夫・改善点

・「日本アフリカ学生交流ポータルサイト」の機能拡充に向け、「日本・アフリカ大学連携ネットワーク (JAAN)」と密接に連携し、本事業実施大学だけでなく、国内でアフリカの大学と教育交流実績のある大学の情報を網羅的かつ効果的に収集した。具体的には、JAAN参加組織とも重複する世界展開力の「日本アフリカ高度人材育成国内大学ネットワーク (国内大学ネットワーク)」の加盟大学に情報提供を依頼し、アフリカの留学生の受け入れに関する情報について、日本の7大学及びアフリカの10大学の情報を追加掲載し、計日本17大学、アフリカ20大学の情報を掲載した。また、アフリカ諸国における生活、安全、健康および危機管理に関する情報について、前年度までに掲載した13カ国に加え、新たに2カ国を追加し、計15カ国の情報を掲載した。このように、アフリカの大学、生活、安全、健康および危機管理の情報とデータベースのサイトを統合し、プラットフォーム事業全体の概要がわかりやすくなるように、同サイトを改善することで、より効果的な情報共有プラットフォームとすることができた。

2. 取組実績【(1)と(2)各1ページ以内】

(1) 日本とアフリカ諸国の大学間交流の推進に関する目標と実績					
【事業申請時の達成目標】			【2022年度末における目標の達成状況】		
	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
(指標1) 日本アフリカ高度人材育成国内大学ネットワークへの新規の参加大学数	0	10	10	10	10
(指標2) アフリカ・日本大学間教育交流ミーティングへの新規の参加大学数	0	16	16	16	16
(指標3) アフリカ実務組織・大学交流会への新規の参加組織・大学数	0	20	20	20	20
(指標4) アフリカ主要大学情報のデータベースに新規に掲載する新規の大学数	0	10	10	10	10
(指標5) アフリカ各国安全健康・危機管理のデータベースへの新規掲載国数	0	5	5	5	5
	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
(指標1) 日本アフリカ高度人材育成国内大学ネットワークへの新規の参加大学数	25	3	0		
(指標2) アフリカ・日本大学間教育交流ミーティングへの新規の参加大学数	0	26	14		
(指標3) アフリカ実務組織・大学交流会への新規の参加組織・大学数	0	38	19		
(指標4) アフリカ主要大学情報のデータベースに新規に掲載する新規の大学数	12	0	8		
(指標5) アフリカ各国安全健康・危機管理のデータベースへの新規掲載国数	9	4	2		
(2) 任意指標に関する目標と実績					
【事業申請時の達成目標】			【2022年度末における目標の達成状況】		
<p>任意指標1. <u>日本及びアフリカの大学間のマッチング支援</u></p> <p>プラットフォーム構築事業のアウトカムとして、本事業の助言・支援を契機とするマッチング（日本とアフリカの大学が教育交流に向けた協議を念頭に連絡をとり合うこと）をできる限り増やすことを目標とする。また実際の教育交流のプログラム構築及び協定締結にも助言・支援する。</p> <p>任意指標2. <u>日本人・アフリカ人の留学経験者のキャリア形成の参考事例</u></p> <p>日本人とアフリカ人の相互の地域での留学経験者が、実際にどのようなキャリアを重ねながら、両地域において社会的な活躍・貢献をしてきたかについて、できる限り学部卒、大学院修了の双方、また異なる学問分野ごとに情報を収集し、参考事例を公開する。期間全体でできる限り多くのキャリア形成の参考事例を収集し、ウェブサイトでの紹介を行う。</p> <p>任意指標3. <u>実務組織の求める日本・アフリカの高度専門人材の具体的内容の収集・整理</u></p> <p>日本の企業やNGO・NPO、国際協力機関等から、必要とされる持続可能な開発に貢献する日本及びアフリカの高度専門人材の具体的条件・内容と、そのために求められる高等教育のありかたについて、できる限り多くの意見を聴取し、体系的に整理し、公開する。</p>			<p>任意指標1. 日本及びアフリカの大学間のマッチング支援</p> <p>日本の大学との連携を図る南アフリカの関連組織に対し京都大学が積極的に支援を行った。ツワネ工科大学が2022年10月に日本を訪問した際に、京都先端科学大学、神戸情報大学院大学、芝浦工業大学の訪問をサポート。2022年7月には在日南アフリカ共和国大使館 科学イノベーション教育担当公使、9月には駐日南アフリカ共和国大使、10月にはプレトリア大学学長一行が京都大学の執行部を表敬訪問し、2国間における大学間交流の促進について議論した。</p> <p>任意指標2. 日本人・アフリカ人の留学経験者のキャリア形成の参考事例</p> <p>日本人・アフリカ人の留学経験者のキャリア形成の参考事例についてアフリカへの留学経験をもつ現職者にインタビューを行い、2件の事例をデータベースで発信した。</p> <p>任意指標3. 実務組織の求める日本・アフリカの高度専門人材の具体的内容の収集・整理</p> <p>「第2回 アフリカ実務組織・大学交流会」を通じて、NGO、コンサルタントが求める人材像に関して参加者に共有することができた。また3月9日から横川電気からのアフリカ人学生をリクルートしたいという要望を受け、以降構築したプラットフォームを通じて募集情報を連絡するなどアフリカ-日本間の人材交流のために努めた。</p>		